

金融経済月報（2003 年 11 月）

2003 年 11 月 25 日

日 本 銀 行

本稿は、11 月 20 日、21 日に開催された政策委員会・金融政策決定会合の時点で利用可能であった情報をもとに記述されている。

■ 基本的見解 ^(注 1) ■

わが国の景気は、緩やかに回復しつつある。

住宅投資は低調に推移しており、公共投資も減少している。また、個人消費は弱めの動きを続けている。しかし、輸出が増加しているほか、設備投資も緩やかな回復を続けている。こうした最終需要動向のもとで、鉱工業生産も横ばいから増加に転じている。この間、雇用者所得は、徐々に下げ止まってきている。

先行きについては、景気は回復を続けるが、そのテンポは緩やかなものにとどまると考えられる。

すなわち、海外経済が高めの成長を続けると予想されるもとで、輸出や生産は増加を続け、設備投資も回復傾向がより明確化していくと予想される。もっとも、過剰債務などの構造的な要因が根強いことを踏まえると、設備投資の増勢は力強さを欠くものにとどまると考えられる。また、個人消費は、雇用・所得環境に目立った改善が期待しにくいもとで、当面、弱めないし横ばい圏内の動きを続ける可能性が高い。この間、公共投資は減少傾向をたどると見込まれる。

物価面をみると、国内企業物価は、機械類の下落と米価の上昇が概ね相殺し、横ばい圏内の動きが続いている。一方、消費者物価は、医療費自己負担やたばこ税の引き上げといった一時的要因がかなり影響して、下落幅が縮小しており、9 月の前年比は -0.1% となった。先行きについては、国内企業物価は、当面、引き続き横ばい圏内で推移する可能性が高い。消費者物価

(注 1) 本「基本的見解」は、11 月 20 日、21 日に開催された政策委員会・金融政策決定会合において、金融政策判断の基礎となる経済及び金融の情勢に関する基本的見解として決定されたものである。

* 図表については本文末にまとめて掲載。

は、米価上昇の影響などにより、前年比が一時的にゼロ%以上となる可能性も考えられるが、需給バランスが徐々に改善しつつもなおかなり緩和した状況のもとで、基調的には緩やかな下落を続けると予想される。

金融面をみると、日本銀行による潤沢な資金供給のもとで、短期金融市場ではきわめて緩和的な状況が続いている。為替・資本市場では、円の為替相場や株価がやや不安定な動きを示している。この間、長期金利は低下している。企業金融を巡る環境は、信用力の低い企業についてはなお厳しい状況にあるが、総じてみればやや緩和される方向にある。CP・社債の発行環境は高格付け企業を中心に総じて良好な状況にあるほか、民間銀行は条件設定などの面で貸出姿勢を幾分緩和している。こうしたもとで、CP・社債の発行残高は引き続き前年を上回って推移しており、民間銀行貸出は減少幅が僅かながら縮小してきている。この間、マネーサプライは、前年比1%台の伸びとなっている。

【背景説明】

1. 実体経済

公共投資は減少している（図表3）。発注の動きを示す公共工事請負金額は、引き続き減少傾向にある。また、工事進捗を反映する公共工事出来高も、減少傾向をたどっている。先行きの公共投資についても、2003年度の公共事業関係予算が削減されていることから、減少が続くと見込まれる。

実質輸出は（図表4（1）、5）、米国経済や東アジア経済の好転を主たる背景に、増加を続けている。7～9月に前期比で増加に転じた後、10月も7～9月対比で大幅な増加となった。こうした動きを地域別にみると（図表5（1））、東アジア向けは、中国向けが増加を続ける中、NIEs向けも、新型肺炎（SARS）の終息などにより7～9月にはっきりと回復した後、10月も伸びを高めた。米国向けについても、自動車関連や消費財を中心に7～9月は減少したが、10月は増加した。財別にみると（図表5（2））、半導体製造装置を含む資本財・部品や、電子部品等の情報関連が、世界的なIT関連需要の回復などを反映して、東アジア向けを中心に増加を続けている（図表6（1）、図表7）。自動車関連は、上記の米国向けの動きを概ね反映したものであった。すなわち、現地在庫の調整や日系メーカーによる現地生産強化の動きを背景に、7～9月はほぼ横ばいの動きにとどまったが、その後在庫調整が進んだことなどから、10月は増加となった（図表6（3））。また、7～9月に減少していた消費財も10月は増加した。

実質輸入は（図表4（1）、8）、均してみれば、緩やかに増加している。7～9月に前期比で小幅の増加となった後、10月は横ばいとなった。こうした動きを財別にみると（図表8（2））、情

報関連や消費財（家電製品）が、中国を含む東アジア各国とわが国との国際分業進展といった構造的な要因も働いて、引き続き増加した。一方、素原料（原油）は、原発再稼働や冷夏を背景に電力用の需要が低下したことなどから、減少している。

この間、純輸出の動きを表す実質貿易収支（実質輸出－実質輸入）は（図表4（2））、以上のような輸出入の動きを反映して、このところ増加しており、とりわけ10月には大幅な増加を示した。なお、名目貿易・サービス収支については、海外旅行の落ち込みを受けた旅行収支の赤字幅縮小などから本年前半に増加していたが、足もとはそうした動きが一段落している。

先行きの輸出については、海外経済が米国および東アジアを中心に高めの成長を続けると予想されることから（図表9-1（2））、増加が続くものとみられる。実際、米国では、金融財政政策に支えられて7～9月のGDP成長率が高い伸びを示したもとで（図表9-2（1））、これまで懸念材料だった雇用面にもやや明るさがみられ始めている。また、東アジアでも、SARSの終息や上記の米国経済の動きを受けて、中国経済が高い成長率を取り戻しているほか、NIEs各国でも輸出や生産が比較的はっきりと回復し始めている。こうした状況からみて、少なくとも近い将来に関する限り、海外経済の下振れリスクは後退してきている。ただし、来年までを展望した場合には、米国経済が、政策効果の減衰後も高めの成長率を続けるかどうかなどを巡って、なお不透明な面が残っている。また、9月下旬以降、為替相場が円高・ドル安に振れており（図表9-1（1））、今後さらに不安定な動きとなる可能性やその影響については、引き続き注意が必要である。

先行きの輸入については、後述するように国内生産が増加を続ける中で、東アジアからの情報関連や資本財・部品を中心に、緩やかな増加基調が続くと予想される。

設備投資は、緩やかな回復を続けている。機械投資の同時指標と考えられる資本財出荷（除く輸送機械）は（図表 10-1(1)）、半導体製造装置などを中心に、7～9月は増加した。また、設備投資の先行指標の一つである機械受注（船舶・電力を除く民需）をみると（図表 10-2(1)）、1～3月、4～6月と続けて比較的是っきりと増加した後、7～9月は減少となったが、均してみれば緩やかな回復基調にある。なお、10～12月の見通し調査は、非製造業を中心にかなりの高い伸びとなっているが、見通しと実績はかなり乖離しうるため、割り引いてみておく必要がある。この間、もう一つの先行指標である建築着工床面積（民間非居住用）も、久方振りに2四半期連続で増加した（図表 10-2(2)）。

先行きの設備投資については、輸出や生産の増加が続くもとで、回復傾向がより明確化していくと予想される。ただし、企業の設備過剰感、徐々に後退してきているとはいえ、根強く残存している（図表 10-1(2)）。過剰債務の残存や期待成長率の低さ、金融面の弱さといった構造的な要因も、ひとところに比べれば改善しつつあるとみられるものの、引き続き作用している。これらを踏まえると、キャッシュ・フローとの対比では慎重な投資が続く可能性が高い。

個人消費は、明暗入り混じっているが、全体としてみれば、なお弱めの動きを続けている。すなわち、耐久消費財に関しては、デジタル家

電を中心に比較的強めの動きとなっているが、非耐久消費財やサービス関連は、冷夏などの天候要因もあって、7～9月は弱い動きとなった。具体的に各種の消費関連指標をみると（図表 11-1、11-2）、乗用車の新車登録台数は、新型車投入効果などからこのところ底固い動きとなっている。家電販売額（NEBA統計、実質ベース）は、デジタル家電（デジタルカメラ、薄型テレビ、DVD）やパソコンの好調に加え、冷夏のため7月に落ち込んだエアコンや冷蔵庫が、残暑の影響もあって8、9月と続けて回復した。一方、全国百貨店売上高、全国スーパー売上高は、冷夏や残暑といった天候要因がマイナスに働いたことなどから、弱い動きとなった。もっとも、10月の都内百貨店売上高はやや持ち直した。この間、コンビニエンス・ストア売上高も、冷夏の影響に、たばこ税引き上げ前の駆け込み購入の反動が加わり、7～9月は減少した。サービス消費では、外食産業売上高が、7、8月に冷夏の影響から落ち込んだ後、9月は回復した。旅行取扱額も、SARSの終息を受けて7～9月は幾分回復しているが、水準としてはなお低めにとどまっている。

これら財、サービスの代表的な販売統計の動きを合成した販売統計合成指数（実質ベース）をみると（図表 11-3）^{（注2）}、均してみれば、このところ弱さがやや目立っている。財のみについて生産者段階で総括的に捉えた消費財総供給も（図表 11-4）、4～6月までは増加していたが、7～9月は減少した。

この間、消費者コンフィデンスを示す指標をみると（図表 12）、消費者態度指数の改善がはっ

（注 2）販売統計合成指数は、代表的な販売統計を消費者物価で実質化したうえで、家計の消費支出ウェイトで加重平均して算出しており、個別の販売統計をまとめて見ることができる利便性を持つ。ただし、サービス消費のカバー率が低いほか、あらゆる販売チャネルを網羅しているわけではない点に、注意が必要である。

きりしてきている。

先行きの個人消費は、後述のとおり企業の人件費抑制姿勢が根強いもとで、雇用者所得に目立った改善が期待しにくいことなどから、引き続き弱めないし横ばい圏内で推移すると考えられる。

住宅投資は、引き続き低調に推移している。新設住宅着工戸数をみると（図表 13(1)）、減税適用を目的とした駆け込み着工などから4～6月は増加したが、7～9月はその反動から減少した。先行きの住宅投資についても、雇用・所得面を含めて特段の押し上げ材料が見当たらないことから、基調としては低調な状態が続くと考えられる。

鉱工業生産は（図表 14(1)）、これまでの横ばい基調から緩やかな増加に転じた。7～9月の生産増加の内訳をみると、半導体製造装置などが内外のIT需要回復により増加したほか、需要の好調なデジタル家電も、これまで生産面で制約要因となっていた電子部品等の品不足が解消されたことから増加している。この間、在庫は（図表 14(1)、16）、低水準横ばい圏内の動きとなっている。

先行きの生産については、輸出の増加を主因としつつ、設備投資の回復や耐久消費財の販売好調にも支えられて、増加が続くとみられる^{（注3）}。企業からの聞き取り調査でも、輸出環境の好転などを受けて、これまで慎重であった生産姿勢に前向きの変化がみられ始めており、とりわけ10～12月の生産は、電子部品・半導体や一般機

械を中心に、比較的しっかりとした増加となる可能性が高まりつつある。もっとも、先行きの需要まで見込んで在庫を積極的に積み増す動きはみられず、その意味では、企業の生産姿勢はなお慎重さを残している。

雇用・所得環境をみると、新規求人数が増加しており、有効求人倍率もここにきて改善テンポを幾分速めつつあるように窺われる（図表 18-1(2)）。所定外労働時間も、いったん頭打ちとなっていたが、足もとは再び増加しつつある（図表 18-2(3)）。また、雇用者数を、カバレッジの広い労働力調査でみると、振れを均せば、前年比ゼロ%近傍で推移している（図表 18-2(1)）。ただし、毎月勤労統計の常用労働者数でみると、前年比マイナス幅の縮小テンポはごく緩やかなものにとどまっている（図表 18-2(2)）。また、完全失業率は（図表 18-1(1)）、このところ幾分低下しているものの^{（注4）}、引き続き高水準で推移している。

この間、賃金の下落にも歯止めがかかってきている。1人当り名目賃金の内訳をみると（図表 17(2)）、所定外給与が前年比小幅のプラスを続ける中で、所定内給与、特別給与とも、前年比ゼロ%圏内の動きとなっている。以上の結果、雇用者所得は徐々に下げ止まってきている。

先行きの雇用・所得については、生産の増加、企業収益の改善が続くとの見通しのもとで、その好影響が次第に及んでいく方向にあると考えられる。しかし、企業の雇用過剰感がなお根強いという、マクロの労働需給が引き緩んでいるた

（注 3）ただし、10、11月の生産予測指数から単純に計算される伸び率（12月を11月対比横ばいと仮定すると10～12月見通しの前期比は+6.9%）については、もともと振れの大きい一般機械の増加寄与が大きいことなどから、かなり割り引いておく必要がある。

（注 4）失業者が減少している一方で、雇用者数も減少して労働力率が低下するなど、景気回復初期としては不自然な動きがみられることを踏まえると、調査サンプル要因などによる一時的な振れが影響している可能性を念頭に置いておく必要がある。

め、企業は、パートやアウトソーシングの利用など、人件費抑制に引き続き取り組んでいく可能性が高い。このため、雇用者所得には、当面目立った改善は期待しにくい。

2. 物価

輸入物価（円ベース、以下同じ）を3か月前比でみると（図表20(2)）、国際商品市況は強含んでいるが（図表20(1)、(3)）、円高の影響により強く表れた結果、足もとは下落している。

国内企業物価（夏季電力料金調整後、以下同じ）を3か月前比でみると（図表21）^{（注5）}、横ばい圏内の動きが続いている。内訳をみると、機械類が、ひとところに比べて緩やかとは言え、引き続き下落している一方で、米価が上昇したほか、鉄鋼など一部の素材関連も上昇している。

企業向けサービス価格（国内需給要因、以下同じ）を前年比でみると（図表22）、リース・レンタル、不動産、一般サービス（自動車修理、建物サービスなど）を中心に、引き続き－1%強の下落となっている。

消費者物価（除く生鮮食品、以下同じ）を前年比でみると（図表23）、4月の医療費自己負担や7月のたばこ税の引き上げといった一時的な要因がかなり影響して、下落幅が縮小しており、9月は－0.1%となった。

先行きの物価情勢を考えると、輸入物価は、国際商品市況の強さと為替円高の相対関係次第であるが、目先はなお弱含みで推移するとみられる。国内企業物価は、機械類が下落を続ける一方、米価上昇の影響が残ることから、当面、横ばい圏内で推移する可能性が高い。消費者物

価の先行きを展望すると、まず企業の低価格戦略については、当面、強弱いずれの方向にも、大きく変化する可能性は低いと考えられる。こうした状況下、消費者物価は、米価上昇の影響などにより、前年比が一時的にゼロ%以上となる可能性も考えられるが、需給バランスが徐々に改善しつつもなおかなり緩和した状況のもとで、基調的には緩やかな下落を続けると予想される。

3. 金融

（1）金融市況

金融面をみると、日本銀行が潤沢な資金供給を行った結果、日本銀行当座預金は、概ね29～30兆円台で推移した（図表27）。

短期市場金利についてみると、無担保コールレート（オーバーナイト物）は（図表25(1)）、引き続きゼロ%近辺で推移した。ターム物金利は（図表26(1)）、総じて低下傾向で推移した。こうした中、ユーロ円金利先物レート（図表25(1)）は、10月中旬に中短期ゾーンにおける金利上昇を背景にやや強含んだ後、振れを伴いつつも徐々に低下している。

長期国債の流通利回り（10年新発債、図表25(2)）は、株価などの動きに影響され易い展開が続いており、11月入り後1.5%台まで上昇したが、足許では、1.3%前後まで低下している。

民間債（銀行債、事業債）と国債との流通利回りスプレッドは（図表29、30）、総じてみると横ばい圏内で推移した。ただし、低格付け物にかかるスプレッドは、投資家の積極的な購入スタンスを映じて縮小した。

（注5）「夏季電力料金調整後」とは、国内企業物価の基調的な動きをみるために、7～9月期における電力料金の季節的上昇を取り除いた系列である。電力使用量が膨らむ7～9月期については、産業用・業務用の電力料金が通常の時期に比べ高めに設定されている。

株価は（図表 31）、10 月中旬にわが国経済の緩やかな回復期待が広がる中で上昇し、日経平均株価は年初来高値を更新したが、その後、米国株価の動向や利益確定売りなどを背景に、最近では 9 千円台後半まで下落するなど、やや不安定な動きを示している。

為替相場をみると（図表 32）、円の対米ドル相場は、米国経常赤字に対する懸念が強まったほか、海外投資家による対内株式投資の継続もあって、10 月下旬にかけて上昇した。その後は、米国景気指標の改善などを背景にしたドル買いがみられたが、最近では地政学的リスクの高まりに対する懸念などから、やや神経質な展開が続いており、108～109 円台で推移している。

（2）企業金融と量的金融指標

資金需要面では、企業の借入金圧縮スタンスが維持されている中で、キャッシュ・フローが設備投資を上回る状況が続いていることなどから、民間の資金需要は引き続き減少傾向をたどっている。

一方、資金供給面をみると、民間銀行は、優良企業に対して貸出を増加させようとする一方で信用力の低い先に対しては慎重な貸出姿勢を維持しているが、条件設定などの面で貸出姿勢を幾分緩和している。この間、企業からみた金融機関の貸出態度は、中小企業等ではなお厳しい状況にあるが、幾分改善している（図表 33）。

貸出金利は、全体としてきわめて低い水準で

推移している。新規貸出約定平均金利は、月々の振れを均してみれば、横ばい圏内の動きとなっている（図表 34）。長期プライムレートは、11 月 11 日に 0.15% 引き上げられ、1.80% となった。

民間銀行貸出（銀行計・月中平均残高、特殊要因調整後^{（注 6）}）は、減少幅が僅かながら縮小してきている（8 月－2.0%→9 月－1.8%→10 月－1.8%、図表 35）。

CP、社債など市場を通じた企業の資金調達環境をみると、高格付け企業を中心に総じて良好な状況にある。社債発行金利は、長期金利の動向を受けてひと頃より幾分高い水準にあるが、発行スプレッドは安定的に推移している。CP 発行金利は、引き続き低水準にある。CP 発行残高は、前年を上回って推移している（図表 37）。社債発行残高は、前年並みの水準となっている。

こうした中、企業の資金繰り判断は、中小企業等ではなお厳しい状況にあるが、幾分改善している。

この間、マネタリーベース（流通現金＋日銀当座預金）は、日銀当座預金の増加を主因に、前年比 2 割程度の伸びを続けている（8 月＋20.5%→9 月＋20.9%→10 月＋20.6%、図表 38）。

マネーサプライ（M2＋CD）は、伸びがやや鈍化し、前年比 1% 台半ばとなっている（8 月＋2.0%→9 月＋1.8%→10 月＋1.5%、図表 39）。

企業倒産件数は、減少傾向が続いており、10 月は 1,368 件、前年比－20.9% となった（図表 40）。

（注 6）「特殊要因調整後」とは、①貸出債権の流動化による変動分、②為替相場変動による外貨建貸出の円換算額の変動分、及び③貸出債権の償却による変動分などを調整した計数である。

(図表 1 - 1)

国内主要経済指標 (1)

(指標名欄の<>内に指示されている場合を除き、季調済前期(月)比、%)

	2003/1-3月	4-6月	7-9月	2003/7月	8月	9月	10月
消費水準指数 (全世帯)	-0.7	0.9	0.0	-5.5	4.4	0.4	n. a.
全国百貨店売上高	-0.3	-1.6	-0.6	-1.7	0.2	-1.8	n. a.
全国スーパー売上高	-0.7	-1.4	-2.4	-3.6	1.6	0.9	n. a.
乗用車新車登録台数(除軽) <季調済年率換算、万台>	< 335>	< 306>	< 314>	< 310>	< 309>	< 322>	< 313>
家電販売額 (実質、NEBA統計)	4.5	3.7	5.4	-7.8	16.1	7.8	n. a.
旅行取扱額(主要50社)	-3.4	-17.9	14.2	10.0	0.6	5.3	n. a.
新設住宅着工戸数 <季調済年率換算、万戸>	< 115>	< 120>	< 112>	< 116>	< 106>	< 113>	< n. a. >
機械受注 (民需、除く船舶・電力)	5.8	3.4	-2.9	-3.1	-4.3	-1.6	n. a.
製造業	5.4	8.6	-3.4	-6.8	-5.7	10.3	n. a.
非製造業 (除く船舶・電力)	5.1	1.3	-2.4	-0.5	-2.9	-9.3	n. a.
建築着工床面積 (民間、非居住用)	-2.2	4.0	1.7	-7.9	8.1	10.0	n. a.
鉱工業	-4.9	0.3	2.8	-18.9	-0.3	2.0	n. a.
非製造業	-0.3	3.0	2.0	-6.6	9.9	15.8	n. a.
公共工事請負金額	-3.1	-5.6	2.0	4.6	-7.2	-0.4	-5.4
実質輸出	-0.8	-0.1	3.8	2.0	2.4	3.7	2.9
実質輸入	0.1	2.0	1.3	-1.2	-2.1	6.4	-3.3
生産	0.3	-0.7	1.3	0.5	-0.7	3.8	n. a.
出荷	0.5	0.2	0.8	-1.0	0.5	3.8	n. a.
在庫	-1.5	-0.6	0.9	1.3	-1.1	0.7	n. a.
在庫率 <季調済、2000年=100>	<99.9>	<98.1>	<97.1>	<99.3>	<100.0>	<97.1>	<n. a. >
実質GDP	0.5	0.9	0.6	n. a.	n. a.	n. a.	n. a.
全産業活動指数	0.6	0.1	0.0	-1.5	0.3	2.2	n. a.

（図表 1－2）

国内主要経済指標（2）

（指標名欄のく>内に指示されている場合を除き、前年比、％）

	2003/1-3月	4-6月	7-9月	2003/7月	8月	9月	10月
有効求人倍率 <季調済、倍>	<0.60>	<0.61>	<0.64>	<0.62>	<0.63>	<0.66>	<n. a. >
完全失業率 <季調済、％>	<5.4>	<5.4>	<5.2>	<5.3>	<5.1>	<5.1>	<n. a. >
所定外労働時間 (事業所規模5人以上)	6.5	4.7	3.6	4.3	3.3	3.1	n. a.
雇用者数(労働力調査)	-0.1	0.3	-0.2	0.1	-0.3	-0.3	n. a.
常用労働者数(毎勤統計) (事業所規模5人以上)	-0.6	-0.6	-0.5	-0.6	-0.4	-0.4	n. a.
一人当り名目賃金 (事業所規模5人以上)	-0.7	1.1	-1.2	-1.9	-1.7	0.4	n. a.
国内企業物価 <夏季電力料金調整、 前期(3か月前)比、％>	-0.9 <0.0>	-1.0 <-0.3>	-0.7 <-0.2>	-0.8 <-0.4>	-0.7 <-0.1>	-0.5 <0.0>	p -0.4 <p 0.1>
全国消費者物価 (除く生鮮食品) <季調済前期(3か月前)比、％>	-0.7 <-0.1>	-0.4 <0.1>	-0.1 <0.1>	-0.2 <0.1>	-0.1 <0.1>	-0.1 <0.1>	n. a. <n. a. >
企業向けサービス価格 (国内需給要因) <季調済前期(3か月前)比、％>	-0.9 <-0.2>	-1.2 <-0.5>	-1.2 <-0.2>	-1.3 <-0.2>	-1.2 <-0.2>	-1.1 <-0.1>	n. a. <n. a. >
マネーサプライ(M ₂ +CD) (平 残)	1.9	1.6	1.8	1.8	2.0	1.8	1.5
取引停止処分件数	-21.7	-15.4	-28.9	-31.9	-27.6	-26.6	-29.0

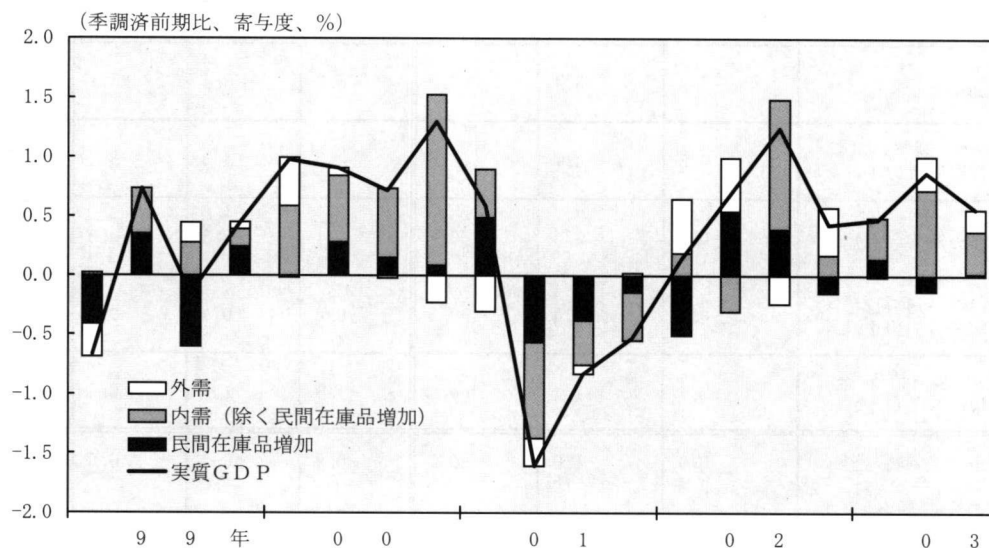
(注) 1. p は速報値。

2. 日本銀行が季節調整を施している指標の季節調整方法及び、日本銀行が作成・加工している指標の算出方法については、該当図表の脚注を参照。

(資料) 総務省「家計調査報告」「労働力調査」「消費者物価指数」、
 経済産業省「商業販売統計」「鉱工業指数統計」「第3次産業活動指数」、
 日本電気大型店協会(NEBA)「商品別売上高」、
 日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、
 国土交通省「建築着工統計」「旅行取扱状況」、内閣府「機械受注統計」「国民経済計算」、
 東日本建設業保証株式会社他「公共工事前払金保証統計」、財務省「外国貿易概況」、
 厚生労働省「職業安定業務統計」「毎月勤労統計」、
 日本銀行「企業物価指数」「企業向けサービス価格指数」「金融経済統計月報」、
 全国銀行協会「全国法人取引停止処分者の負債状況」

実質GDPの推移

(1) 実質GDPの前期比



(注) 1999/10～12月以前については、「参考系列」を使用した。

(2) 需要項目別の動向

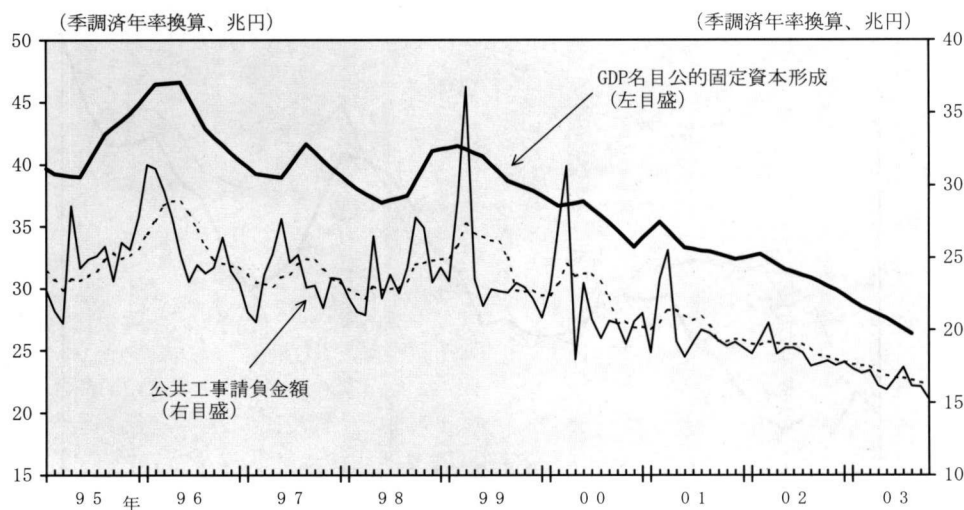
	(季調済前期比%、()内は寄与度%)				
	2002年		2003年		
	7～9月	10～12	1～3	4～6	7～9
実 質 G D P	1.2	0.4	0.5	0.9	0.6
国 内 需 要	1.5	0.0	0.5	0.6	0.4
民間最終消費支出	1.4	-0.3	0.2	0.1	0.0
民間企業設備	1.8	3.6	2.5	4.7	2.8
民 間 住 宅	-0.6	-1.1	-0.7	0.2	2.7
民間在庫品増加	(0.4)	(-0.1)	(0.1)	(-0.1)	(0.0)
公 的 需 要	0.3	-0.8	-0.7	-0.6	-1.0
公的固定資本形成	-1.7	-2.6	-3.9	-2.6	-3.9
純 輸 出	(-0.2)	(0.4)	(-0.0)	(0.3)	(0.2)
輸 出	-0.2	4.7	0.5	1.5	2.8
輸 入	2.5	1.5	0.7	-1.2	1.7
名 目 G D P	0.7	-0.5	-0.1	0.3	-0.0

(資料) 内閣府「国民経済計算」

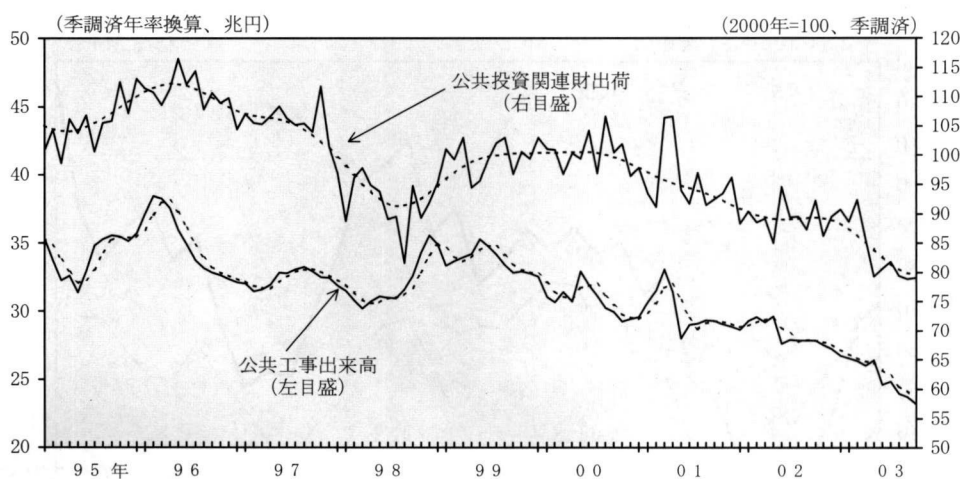
(図表 3)

公 共 投 資

(1) 公共工事請負金額と名目公的固定資本形成



(2) 公共投資関連財出荷と公共工事出来高

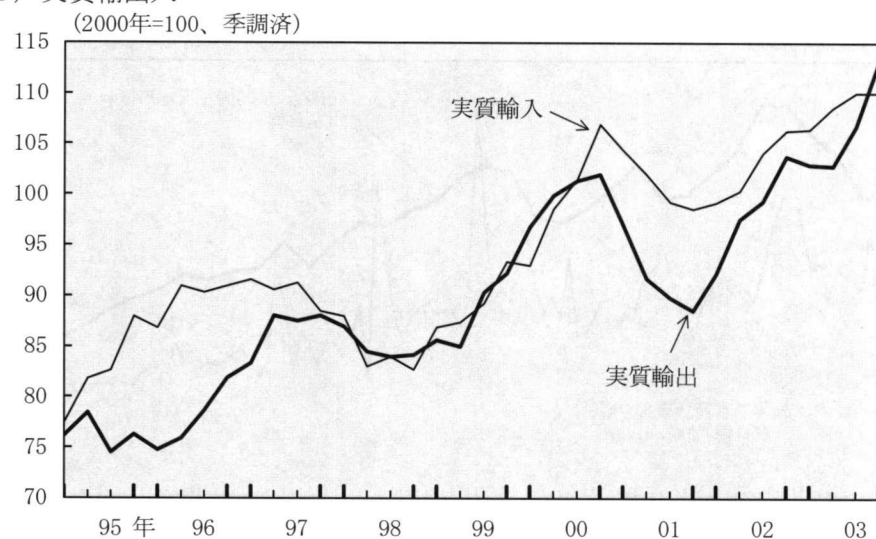


- (注) 1. 公的固定資本形成は、四半期の値を中心月にプロット。公的固定資本形成は、1999/10～12月以前については、「参考系列」を使用した。
2. 公共投資関連財出荷は、アスファルト、道路用コンクリート製品、橋梁、セメントをそれぞれの2000年基準の出荷ウェイトで加重平均。なお、これらの財の出荷には民間需要向けも含まれる。
3. 公共工事出来高は、国土交通省「建設総合統計」の総合表ベース。なお、2002/3月以前の計数については、総合表の旧分類による時系列の前年比の伸び率を用いて遡及した。
4. 公共工事請負金額、公共投資関連財出荷及び公共工事出来高は、X-12-ARIMAによる季節調整値。公共投資関連財出荷は、毎月季節調整替えを行うため、過去に遡って毎月改訂される。
5. 点線のうち、公共工事請負金額については後方6か月移動平均値、公共投資関連財出荷については趨勢循環変動成分、公共工事出来高については後方3か月移動平均値。

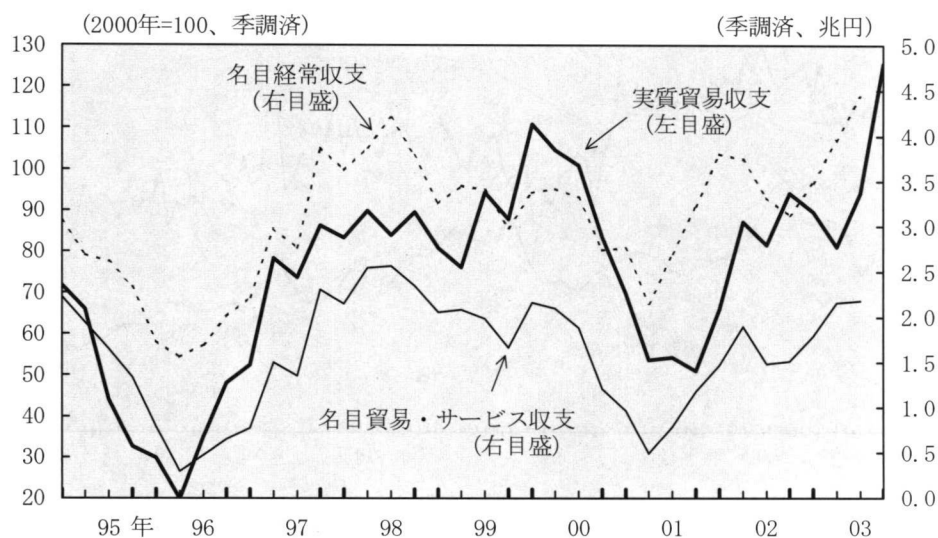
(資料) 内閣府「国民経済計算」、東日本建設業保証株式会社他「公共工事前払金保証統計」、国土交通省「建設総合統計」、経済産業省「鉱工業指数統計」

輸 出 入

(1) 実質輸出入



(2) 対外収支



- (注) 1. 実質輸出(入)は、通関輸出(入)金額を輸出(入)物価指数で各々デフレートし、指数化したもの。
 実質貿易収支は、実質輸出(入)の差を指数化したもの。
 2. 実質輸出入及び実質貿易収支は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2003/4Qは10月の値。
 3. 国際収支統計の95年以前は、旧ベース。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」「国際収支統計月報」

(図表 5)

実質輸出の内訳

(1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2001年	2002	2002年 4Q	2003 1Q	2Q	3Q	4Q	2003年 8月	9	10
米国	<28.5>	-7.7	1.4	3.4	-9.9	0.9	-1.5	5.8	-0.6	6.4	1.8
EU	<14.7>	-10.1	-0.0	1.4	6.3	0.2	1.2	2.0	-0.0	5.9	-1.8
東アジア	<41.5>	-9.0	17.5	3.4	7.9	-2.5	7.1	9.1	6.4	0.5	6.6
中国	<9.6>	12.4	35.5	3.3	21.7	0.7	8.3	6.2	9.3	-0.5	3.6
NIEs	<22.7>	-15.2	14.4	4.4	4.5	-5.2	7.8	12.8	7.0	-1.2	11.3
韓国	<6.9>	-8.4	19.1	6.2	7.7	-8.1	9.3	8.2	2.2	4.2	4.6
台湾	<6.3>	-25.3	14.6	2.1	4.9	-6.2	9.1	18.2	12.9	-3.4	16.4
ASEAN4	<9.3>	-7.8	10.2	1.0	2.1	0.2	4.1	3.9	1.4	5.9	-0.4
タイ	<3.2>	-3.6	16.5	4.0	0.2	2.6	7.4	3.7	1.1	6.1	-0.6
実質輸出計		-8.6	7.2	4.5	-0.8	-0.1	3.8	6.2	2.4	3.7	2.9

(注) 1. < >内は、2002年通関輸出額に占める各地域・国のウェイト。
 2. ASEAN4は、タイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。
 3. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2003/4Qは10月の7～9月対比。

(2) 財別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2001年	2002	2002年 4Q	2003 1Q	2Q	3Q	4Q	2003年 8月	9	10
中間財	<15.3>	-3.2	8.8	-2.4	4.3	0.4	0.4	5.6	0.1	4.9	2.3
自動車関連	<24.3>	-1.8	12.7	5.0	-1.3	-5.3	0.1	4.1	0.9	10.2	-2.6
消費財	<7.1>	-4.8	7.9	10.6	0.4	0.9	-2.6	18.9	4.9	3.6	14.3
情報関連	<14.8>	-10.5	0.3	3.0	-3.9	3.0	8.9	2.0	8.6	-2.1	0.7
資本財・部品	<27.3>	-14.6	7.8	5.2	1.9	1.6	6.9	4.7	0.9	5.4	0.8
実質輸出計		-8.6	7.2	4.5	-0.8	-0.1	3.8	6.2	2.4	3.7	2.9

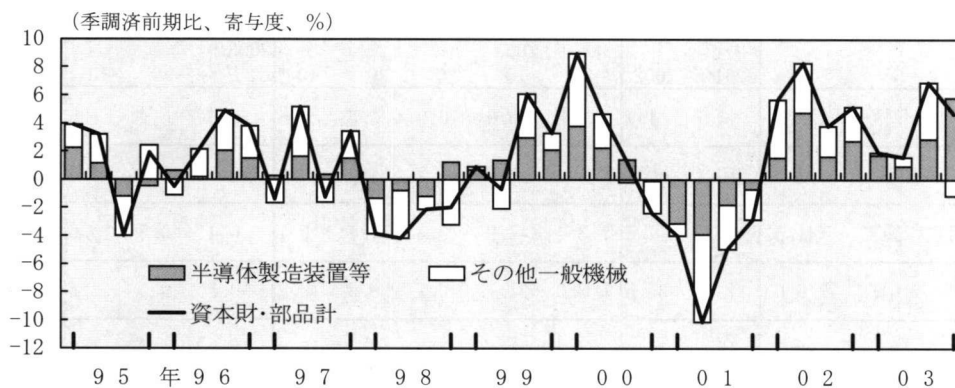
(注) 1. < >内は、2002年通関輸出額に占める各財のウェイト。
 2. 「消費財」は、自動車を除く。
 3. 「情報関連」は、自動データ処理機械、通信機、IC等電子部品、科学光学機器。
 4. 「資本財・部品」は、情報関連、原動機、自動車部品を除く。
 5. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2003/4Qは10月の7～9月対比。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

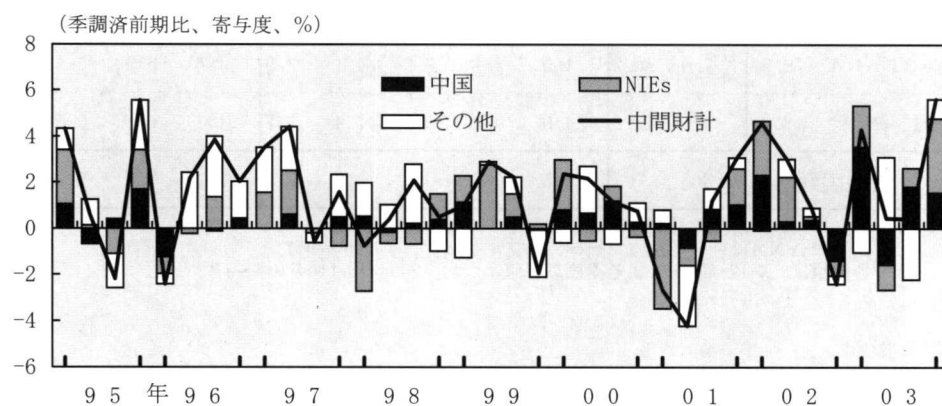
(図表 6)

財別輸出の動向

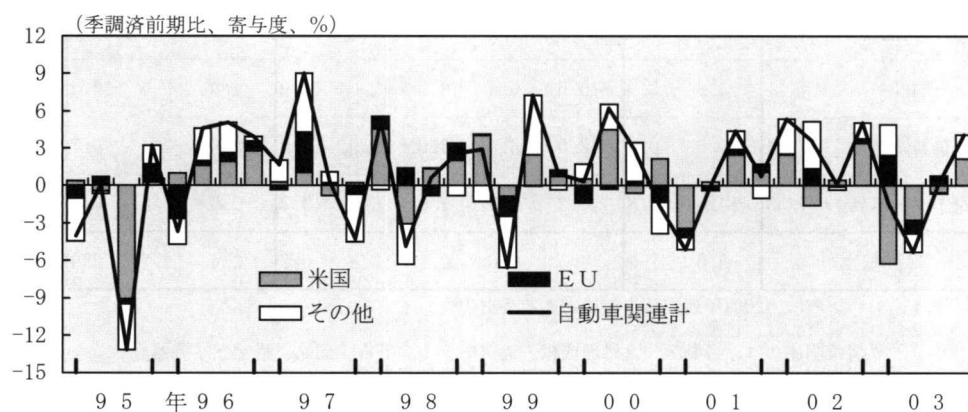
(1) 資本財・部品 (実質、財別)



(2) 中間財 (実質、地域別)



(3) 自動車関連 (実質、地域別)



(注) 各計数ともX-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2003/4Qは10月の7～9月対比。

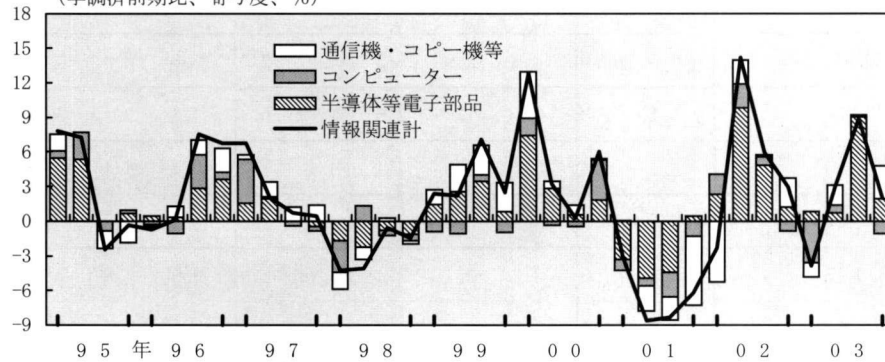
(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

(図表 7)

情報関連の輸出入

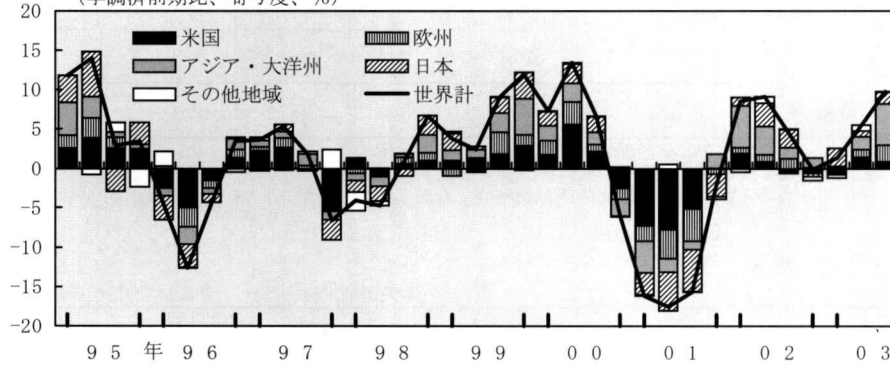
(1) 情報関連輸出（実質、品目別）

(季調済前期比、寄与度、%)



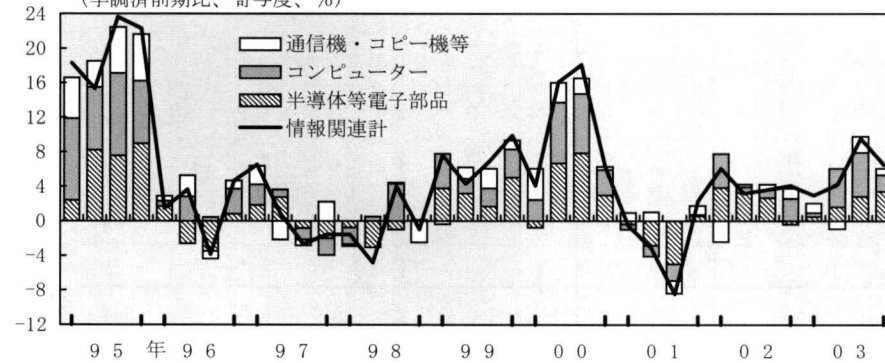
(2) 世界半導体出荷（名目、地域別）

(季調済前期比、寄与度、%)



(3) 情報関連輸入（実質、品目別）

(季調済前期比、寄与度、%)



(注) 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。2003/4Qは、10月の7～9月対比。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」、WSTS「世界半導体市場統計」

(図表 8)

実質輸入の内訳

(1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2001年	2002	2002年 4Q	2003 1Q	2Q	3Q	4Q	2003年 8月	9	10
米国	<17.1>	-0.6	-3.9	-4.5	-2.9	5.2	-0.9	2.0	-5.0	6.3	-0.4
E U	<13.0>	6.1	2.3	1.5	-1.6	2.6	1.7	-0.4	4.4	2.4	-3.3
東アジア	<41.4>	6.1	6.4	5.7	0.6	4.4	4.4	3.0	-0.1	4.1	0.4
中国	<18.3>	16.5	13.9	8.3	3.9	5.3	4.8	1.9	-0.4	4.2	-0.8
N I E s	<10.5>	-3.3	1.8	2.1	-2.1	2.4	7.7	6.9	0.5	4.6	3.6
韓国	<4.6>	-3.2	-1.5	2.8	-0.1	4.0	2.6	12.9	-4.8	3.7	12.0
台湾	<4.0>	-5.1	5.5	-0.2	-2.8	0.6	12.4	5.6	5.8	5.3	0.2
ASEAN 4	<12.6>	3.6	1.5	5.3	-1.5	4.7	1.2	1.5	-0.2	3.6	-0.7
タイ	<3.1>	10.4	7.6	5.0	-1.6	2.5	5.4	5.4	1.3	6.8	0.5
実質輸入計		1.2	1.2	2.2	0.1	2.0	1.3	0.0	-2.1	6.4	-3.3

(注) 1. < >内は、2002年通関輸入額に占める各地域・国のウェイト。
 2. ASEAN4 はタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。
 3. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2003/4Qは10月の7～9月対比。

(2) 財別

		(前年比、%)			(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年		2002年		2003				2003年		
		2001年	2002	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	8月		9	10
素原料	<25.3>	-4.1	-2.7	4.0	3.7	-0.3	-3.8	-5.7	-2.9	1.6	-5.8	
中間財	<13.0>	-1.1	1.4	-0.2	1.0	-0.4	2.2	2.5	-0.9	6.9	-1.6	
食料品	<12.5>	-0.0	-2.5	-3.3	-1.0	-1.4	-0.1	3.4	-7.1	5.5	2.3	
消費財	<11.0>	7.9	-0.9	5.5	-3.8	3.5	3.6	4.1	-2.8	4.2	2.3	
情報関連	<14.4>	9.6	7.8	4.1	3.0	4.2	9.5	6.6	4.1	4.3	2.3	
資本財・部品	<12.9>	10.6	11.5	1.4	-2.2	12.2	-2.4	3.8	-7.9	4.0	4.0	
うち除く航空機	<11.8>	13.9	8.3	5.3	0.3	5.1	-0.5	7.4	-3.8	5.1	5.3	
実質輸入計		1.2	1.2	2.2	0.1	2.0	1.3	0.0	-2.1	6.4	-3.3	

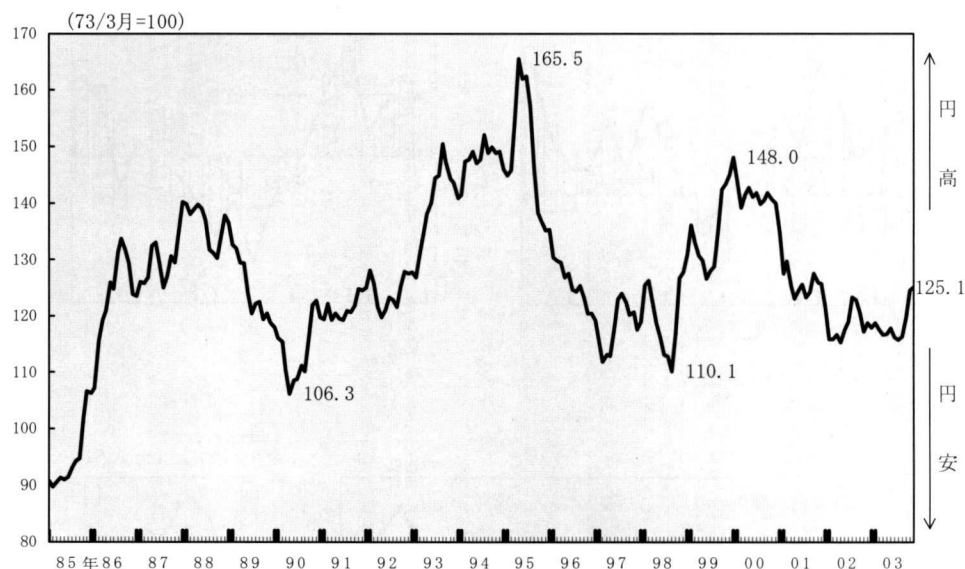
(注) 1. < >内は、2002年通関輸入額に占める各財のウェイト。
 2. 「素原料」は、原料品、鉱物性燃料。
 3. 「消費財」は、食料品を除く。
 4. 「情報関連」は、事務用機器、通信機、IC等電子部品、科学光学機器。
 5. 「資本財・部品」は、情報関連を除く。
 6. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2003/4Qは10月の7～9月対比。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

（図表 9－1）

輸出を取り巻く環境（1）

（1）実質実効為替レート（月中平均）



（注） 1. 日本銀行試算値。直近11月は20日の値。

2. 主要輸出相手国通貨（15通貨、26カ国・地域）に対する為替相場（月中平均）を、当該国・地域の物価指数で実質化したうえ、通関輸出金額ウェイトで加重平均したもの。

（2）海外経済 —— 実質GDP

（欧米は前期比年率、東アジアは前年比、％）

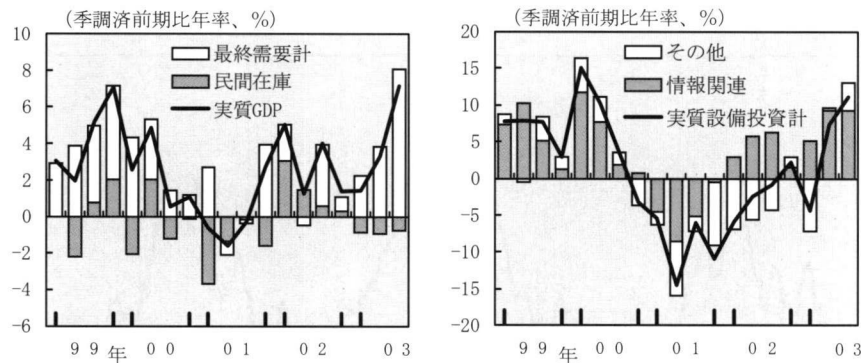
		2000年	2001年	2002年	2002年 4Q	2003年 1Q	2Q	3Q
米 国		3.8	0.3	2.4	1.4	1.4	3.3	7.2
欧 州	E U	3.6	1.7	1.0	0.4	0.2	0.1	n. a.
	ド イ ツ	2.9	0.8	0.2	-0.2	-1.0	-0.6	0.9
	フ ラ ン ス	4.2	2.1	1.2	-1.1	0.2	-1.4	1.5
	英 国	3.8	2.1	1.7	2.1	0.7	2.4	2.3
東 中 国		8.0	7.3	8.0	8.1	9.9	6.7	9.1
ア ジ ア	N 韓 国	9.3	3.1	6.3	6.8	3.7	1.9	n. a.
	I 台 湾	5.9	-2.2	3.6	4.5	3.5	-0.1	4.2
	E 香 港	10.2	0.5	2.3	5.1	4.5	-0.5	n. a.
	s シンガポール	9.4	-2.4	2.2	3.0	1.6	-3.8	1.7
ア S E A N 4	タ イ	4.6	1.9	5.3	6.2	6.7	5.8	n. a.
	インドネシア	4.9	3.4	3.7	3.8	3.4	3.7	3.9
	マレーシア	8.5	0.3	4.1	5.4	4.6	4.4	n. a.
	フィリピン	6.0	3.0	4.4	5.8	4.5	3.2	n. a.

（注） 計数は、各国政府または中央銀行、欧州委員会による。

(図表 9-2)

輸出を取り巻く環境 (2)

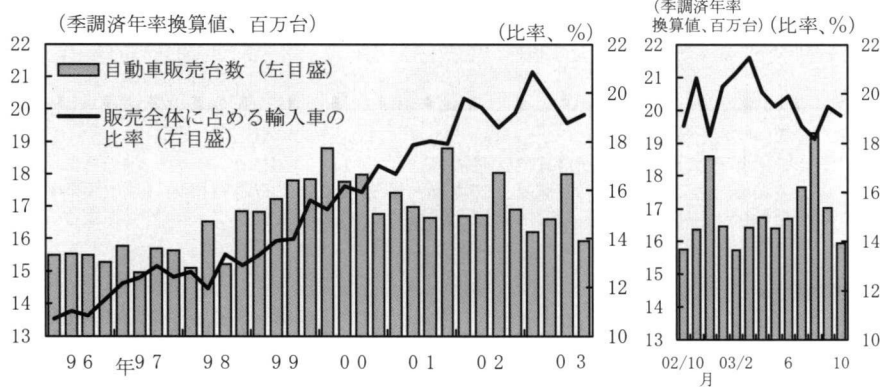
(1) 米国のGDP内訳(最終需要・在庫別) (2) 米国の設備投資



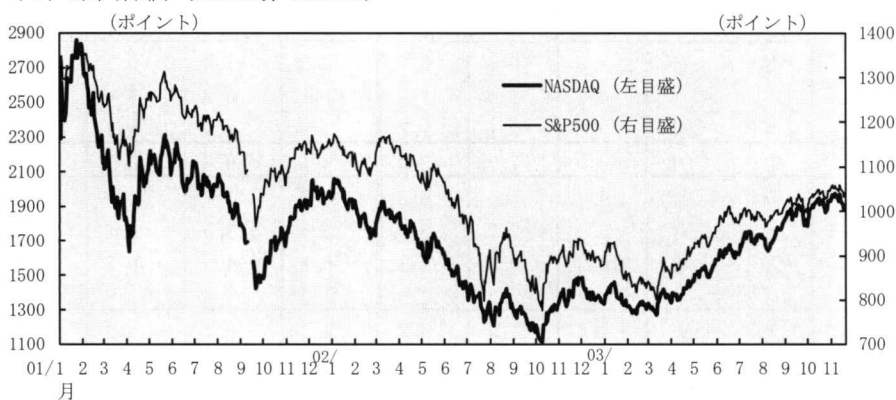
(3) 米国の自動車販売

<四半期>

<月次>



(4) 米国株価 (NASDAQ、S&P500)



(注) 1. (3) の自動車販売台数の2003/4Qは、10月の値。
2. (4) の直近は、11月20日の値。

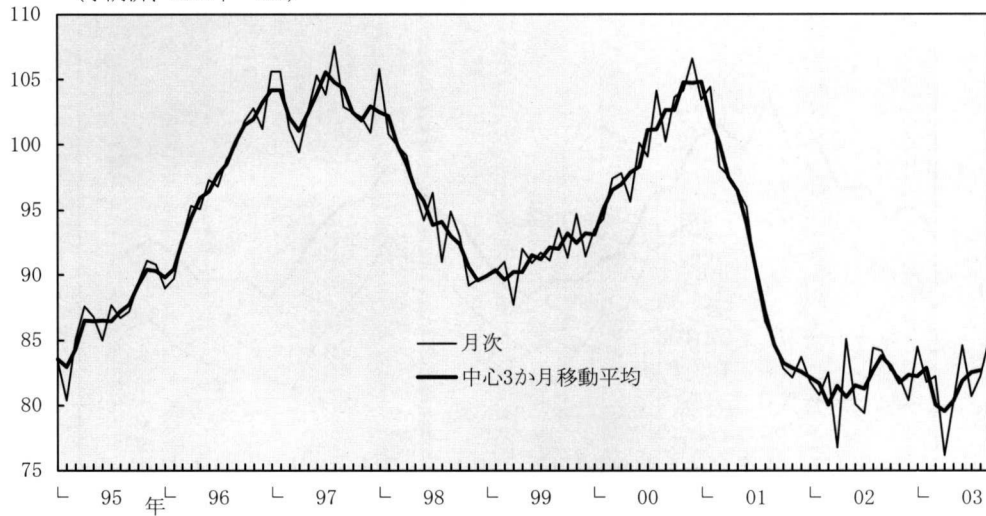
(資料) U.S. Department of Commerce, "National Income and Product Accounts",
"Sales, production, imports, exports, and inventories, in units",
Bloomberg

(図表 10-1)

設備投資関連指標 (1)

(1) 資本財出荷 (除く輸送機械)

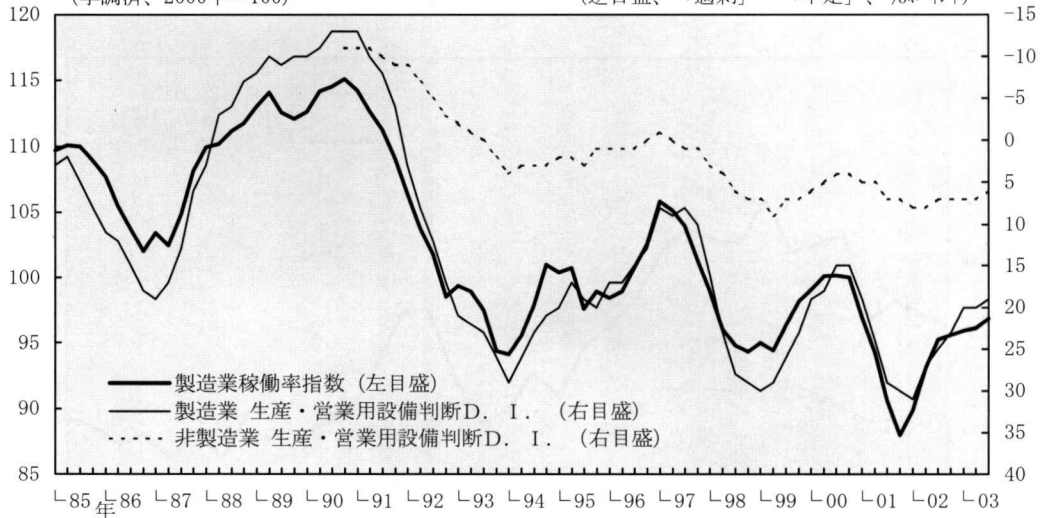
(季調済、2000年=100)



(2) 稼働率と設備判断D. I.

(季調済、2000年=100)

(逆目盛、「過剰」-「不足」、%ポイント)



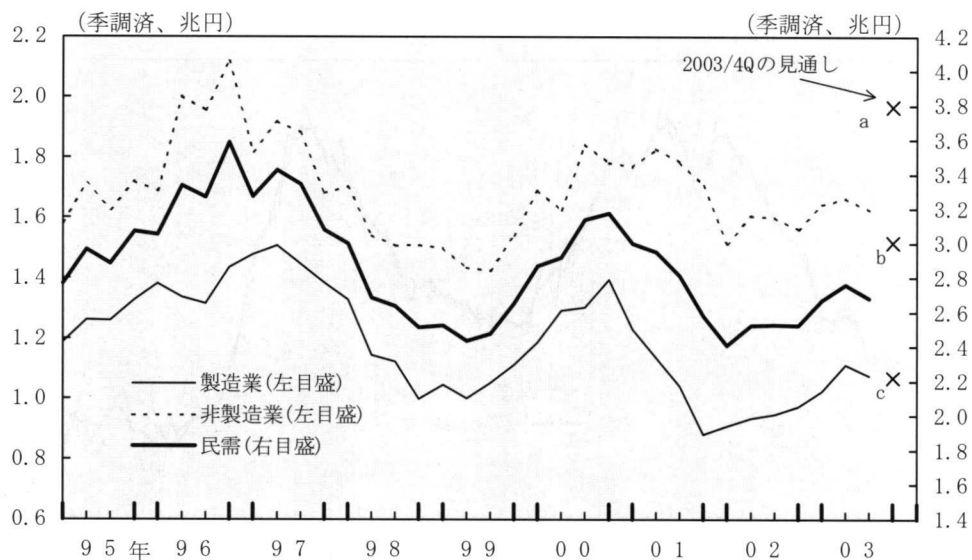
(注) 生産・営業用設備判断D. I. は全規模合計。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」、日本銀行「企業短期経済観測調査」

(図表10-2)

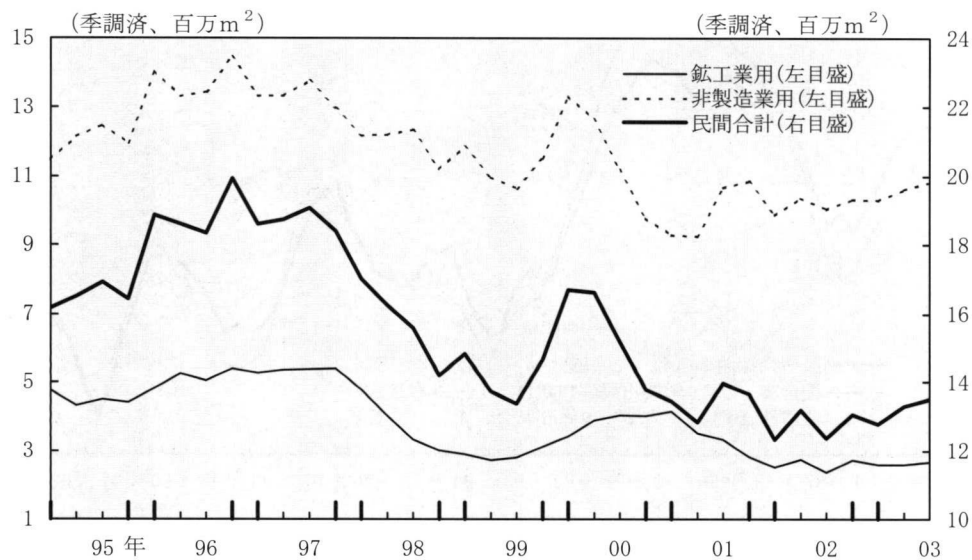
設備投資関連指標 (2)

(1) 機械受注



(注) 1. 民需と非製造業は、それぞれ船舶・電力を除く。
2. 2003/4Qの見通しは、aは非製造業、bは民需、cは製造業の見通し。

(2) 建築着工床面積 (非居住用)



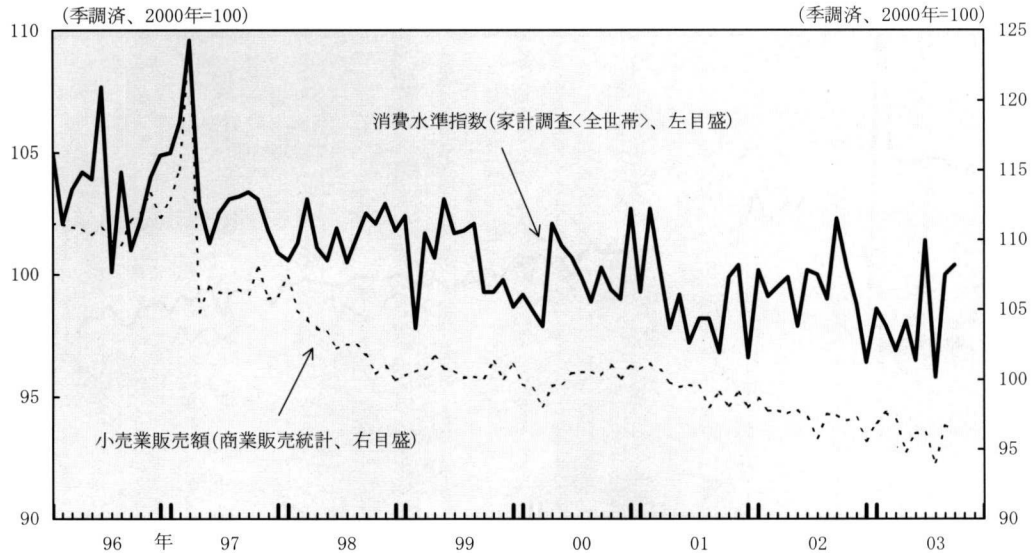
(注) X-12-ARIMAによる季節調整値。

(資料) 内閣府「機械受注統計」、国土交通省「建築着工統計」

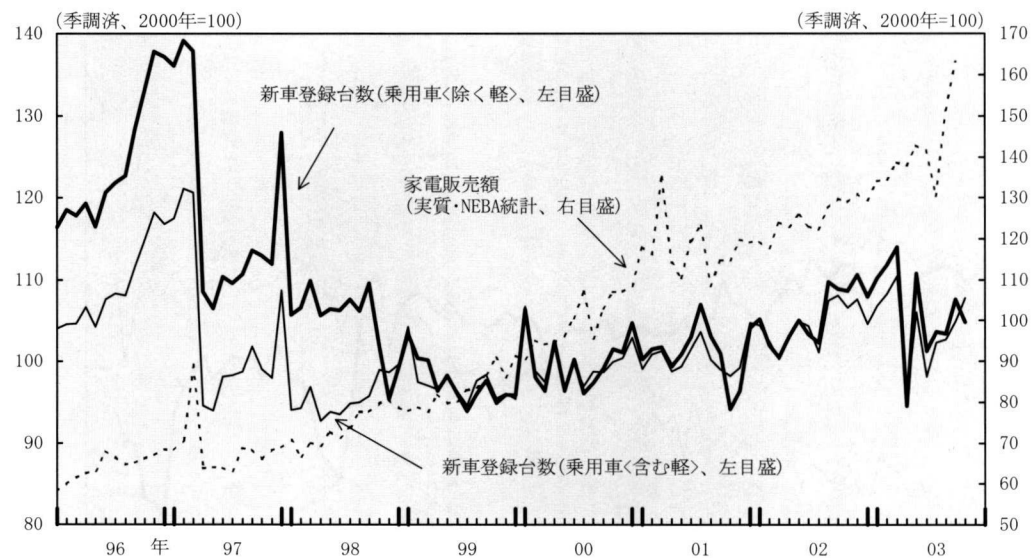
（図表 11－1）

個人消費関連指標（1）

（1）家計調査・商業販売統計（実質）



（2）耐久消費財

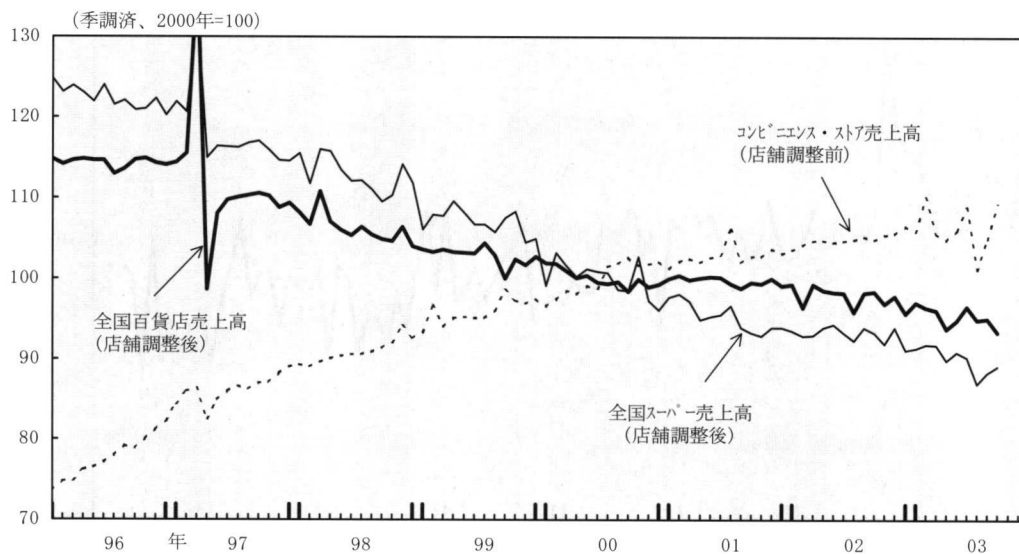


- （注）1. X-12-ARIMAによる季節調整値。但し、消費水準指数は総務省による季節調整値。
 2. 小売業販売額は、CPI（財）で実質化。家電販売額は、各品目ごとにCPI（但し99年以前のパソコンはWPIで代用）で実質化したものを積み上げて算出。

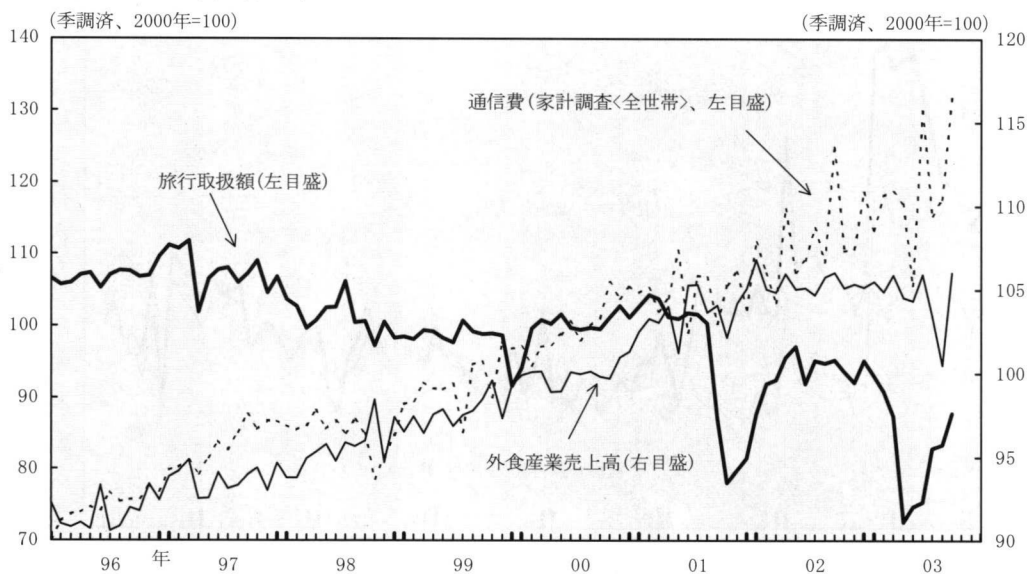
（資料）総務省「家計調査報告」「消費者物価指数」、日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、経済産業省「商業販売統計」、全国軽自動車協会連合会「軽自動車新車販売速報」、日本電気大型店協会（NEBA）「商品別売上高」、日本銀行「卸売物価指数」

個人消費関連指標 (2)

(3) 小売店販売 (名目・除く消費税)



(4) サービス消費 (名目)

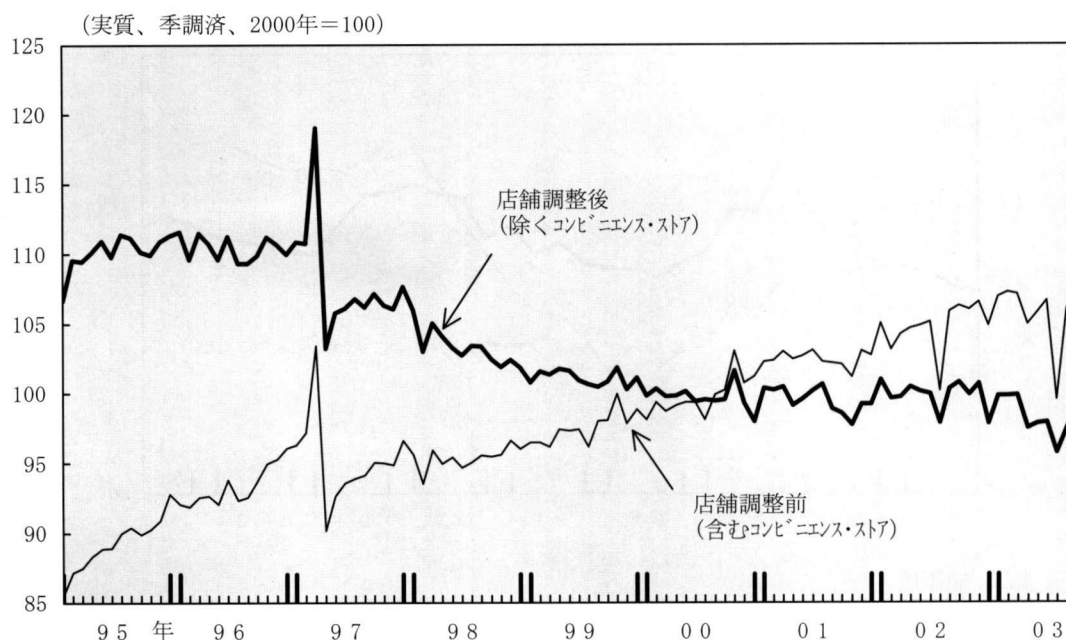


- (注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。
 2. 旅行取扱額、外食産業売上高は、消費税分を控除したもの。
 3. コンビニエンス・ストア売上高は、97/3月以前は、日本銀行におけるヒアリング集計ベース。
 97/4月以降は経済産業省ベース。
 4. 外食産業売上高は、93年の外食総研のデータを基準とし、日本フードサービス協会の前年比で延長。

(資料) 経済産業省「商業販売統計」、国土交通省「旅行取扱状況」、総務省「家計調査報告」、
 外食総研「月次売上動向調査」、日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」

（図表 11-3）

個人消費関連指標（3） （販売統計合成指数）



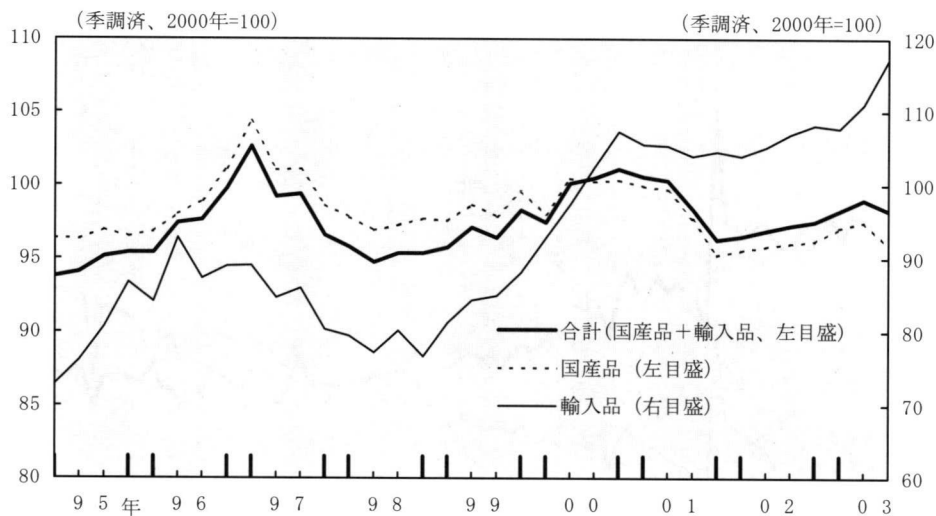
- （注）1. 販売統計合成指数とは、全国百貨店・スーパー売上高、新車登録台数、家電販売額、旅行取扱額、外食産業売上高の各統計を、家計調査の支出額ウェイトをもとに合成することにより作成している。同指数には、店舗調整前と店舗調整後の2系列が存在する。
「店舗調整前」は、出店や閉店といった店舗数の変化に伴う売上高の変動も反映される指数である（店舗調整前の指数には、コンビニエンス・ストア売上高を含めている）。他方、「店舗調整後」は、継続的に売上高を把握できる店舗分だけで消費動向を捉えようとしたものである。
2. 名目額で公表されているものについては、それぞれ該当の物価指数を用いて実質化している。
3. X-12-ARIMAによる季節調整値。

（資料） 経済産業省「商業販売統計」、総務省「家計調査報告」「消費者物価指数」、日本銀行「卸売物価指数」、日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、全国軽自動車協会連合会「軽自動車新車販売速報」、日本電気大型店協会（NEBA）「商品別売上高」、国土交通省「旅行取扱状況」、外食総研「月次売上動向調査」、日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」

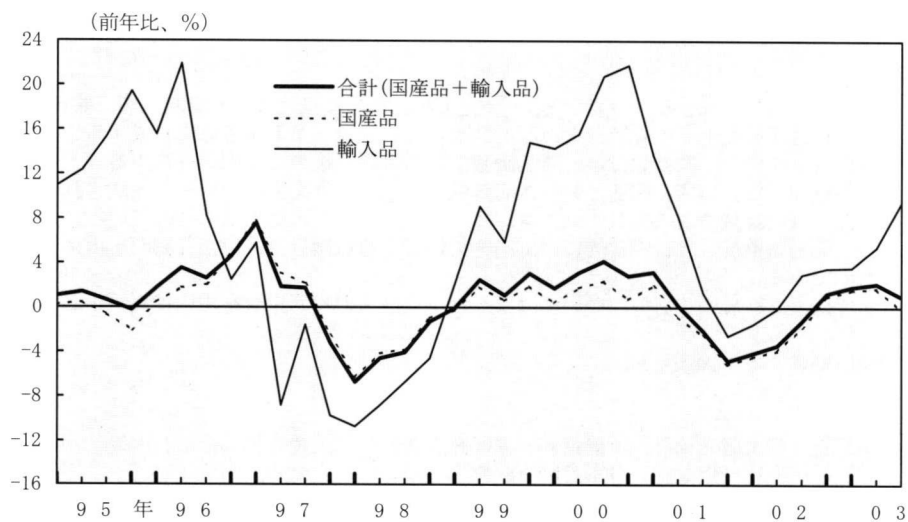
(図表 11-4)

個人消費関連指標 (4) (消費財総供給)

(1) 水準



(2) 前年比



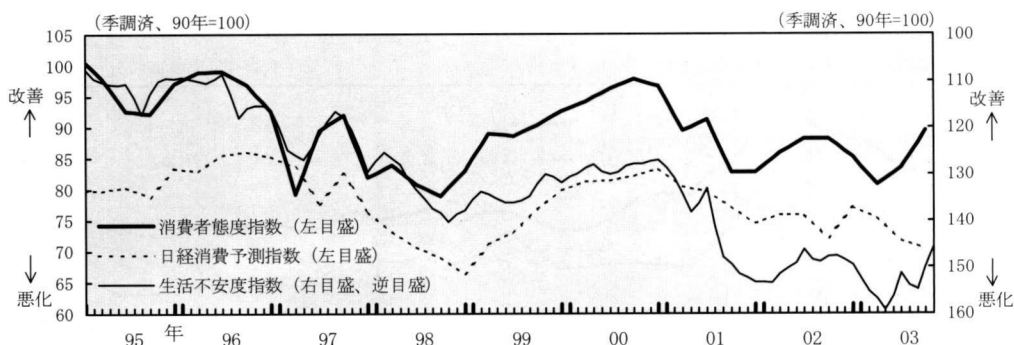
- (注) 1. 消費財総供給は、鉱工業指数統計における消費財出荷と、消費財の実質輸出入から日本銀行が算出している。算出の際のウェイトは鉱工業総供給表のウェイトを使用。
2. 「輸入品」の値は、通関統計から作成した実質輸入（消費財）を用いて試算したもの。但し、実質輸入（消費財）は、自動車、音響映像機器、事務用機器、食料品、繊維製品を合成したもの。
3. 前年比は、季節調整済系列より算出。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」「鉱工業総供給表」、財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

（図表 1 2）

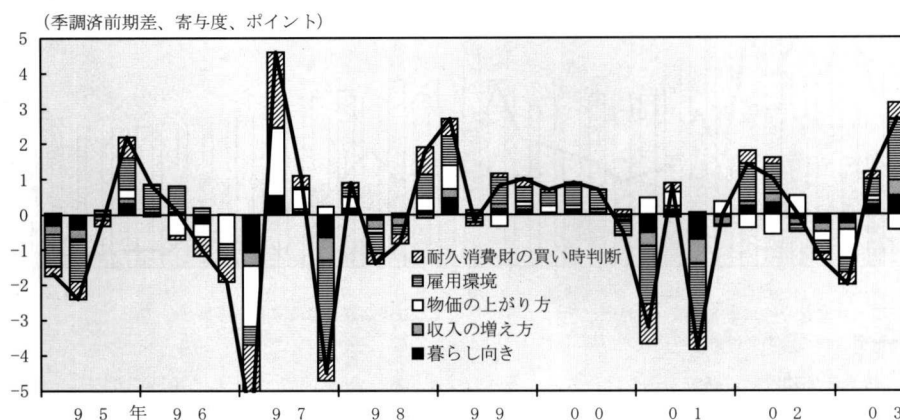
消費者コンフィデンス

（1）各種コンフィデンス指標

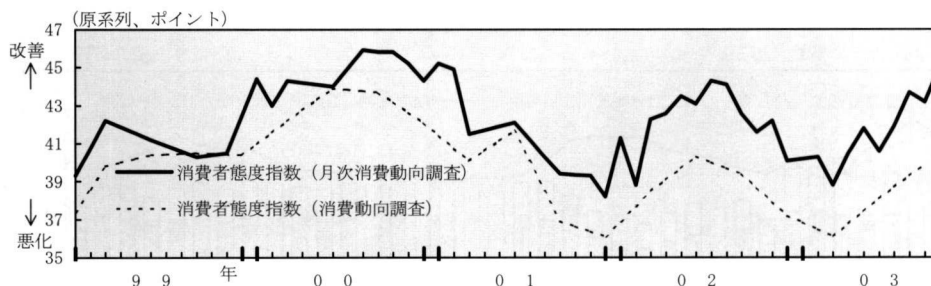


- (注) 1. X-11による季節調整値。但し、消費者態度指数は、内閣府による季節調整値。
 2. 消費者態度指数（調査対象全国 5,040世帯）、日経消費予測指数（同首都圏 1,500人）、生活不安度指数（同全国 2,200人）はいずれも消費者意識を尋ねたアンケート調査。
 3. 生活不安度指数とそれ以外とは調査月が異なるため、計数を各々の調査月にプロット。
 4. 消費者態度指数は内閣府、日経消費予測指数は日経産業消費研究所、生活不安度指数は日本リサーチ総合研究所、による調査。

（2）消費者態度指数の項目別寄与



（参考）月次消費動向調査（東京都）



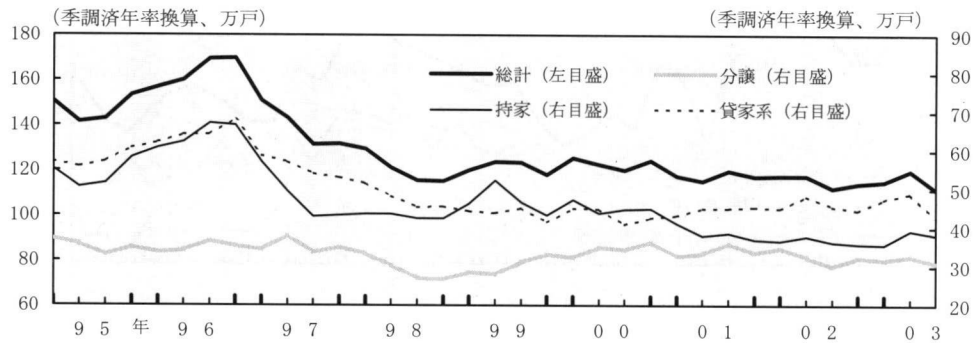
- (注) 月次消費動向調査は、四半期毎に実施される消費動向調査の一部項目について、調査範囲を東京都に限定して毎月実施（調査対象は東京都内 435世帯）。なお、2001年以前で、調査が実施されていない月については、線形補間を行った。

(資料) 内閣府「消費動向調査」「月次消費動向調査」、日経産業消費研究所「日経消費予測指数」、日本リサーチ総合研究所「消費者心理調査」

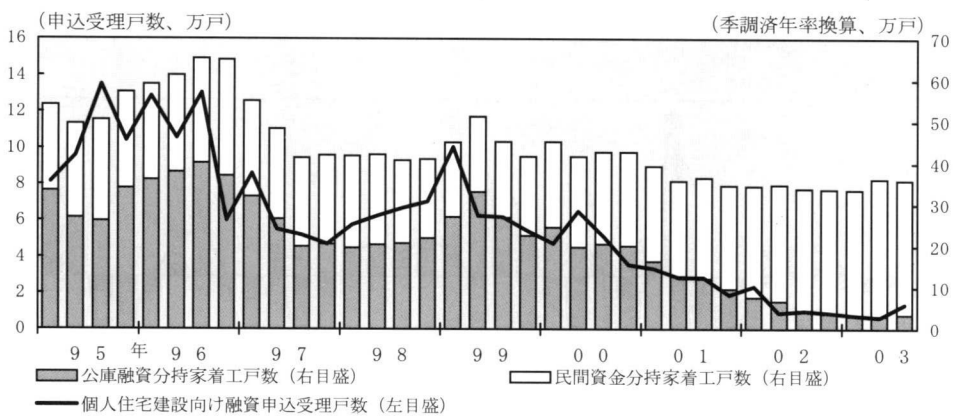
(図表 1 3)

住宅投資関連指標

(1) 新設住宅着工戸数

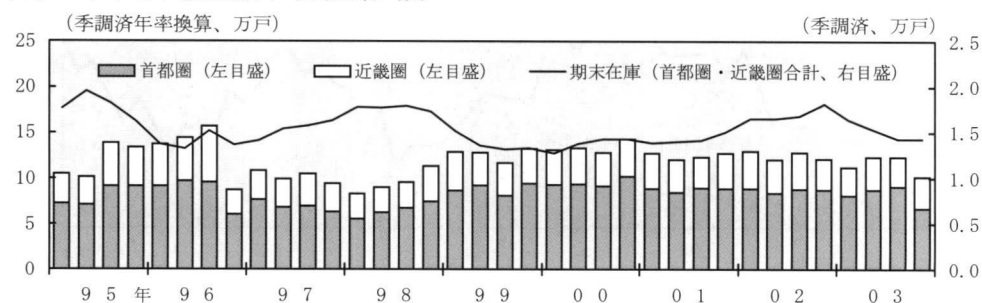


(2) 個人住宅建設向け融資申込受理戸数と持家着工



(注) 個人住宅建設向け融資申込受理戸数は、各回の受理戸数を各四半期に含まれる申込期間の営業日数に応じて按分したもの。

(3) マンション販売動向 (全売却戸数)



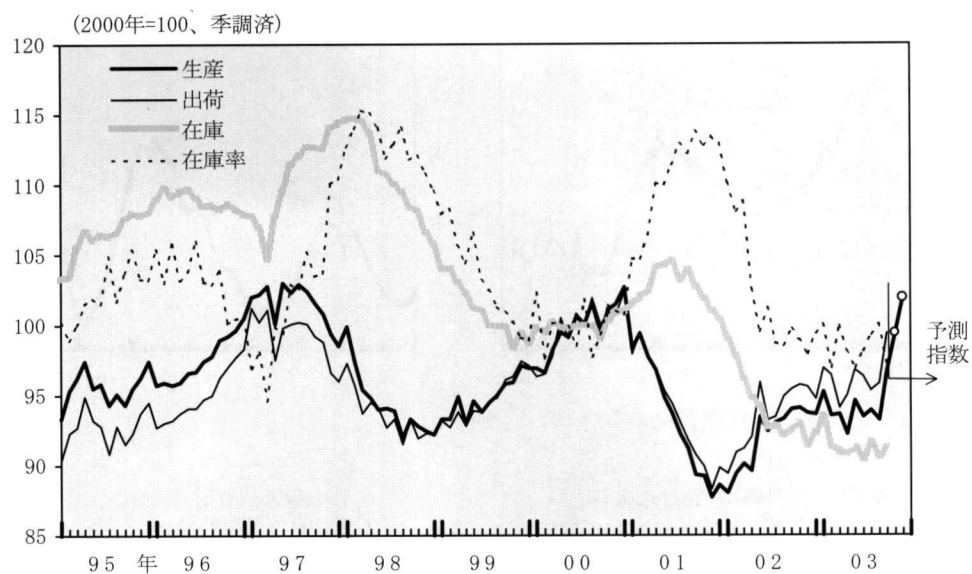
(注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。
2. 2003/4Qは10月の値。

(資料) 国土交通省「建築着工統計」、住宅金融公庫、不動産経済研究所「不動産経済調査月報」

(図表 1 4)

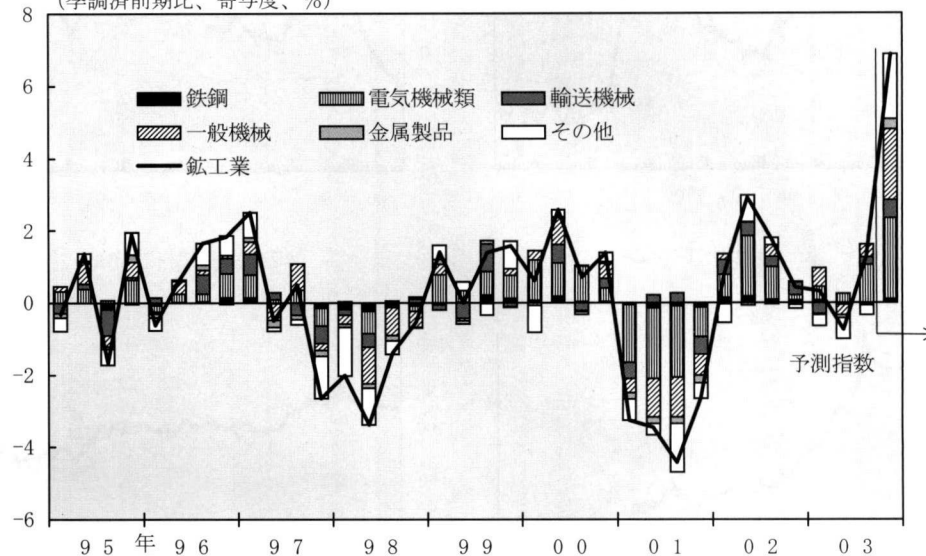
鋁工業生産・出荷・在庫

(1) 鋁工業生産・出荷・在庫



(2) 生産の業種別寄与度

(季調済前期比、寄与度、%)



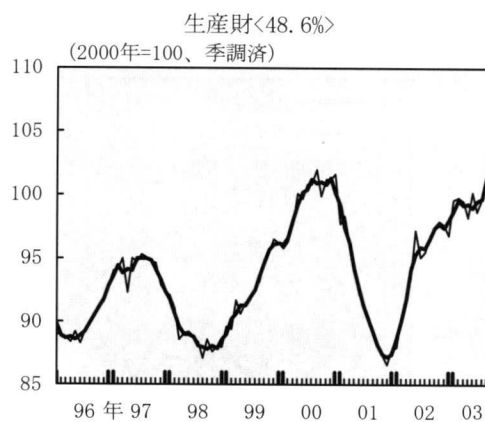
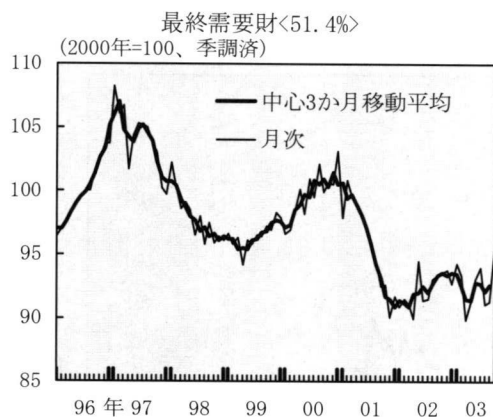
- (注) 1. 輸送機械は船舶・鉄道車両を除く。電気機械類は電気機械、情報通信機械、電子部品・デバイスを合成したもの。
2. 2003/10～12月は、12月を11月と同水準と仮定。

(資料) 経済産業省「鋁工業指数統計」

(図表 15)

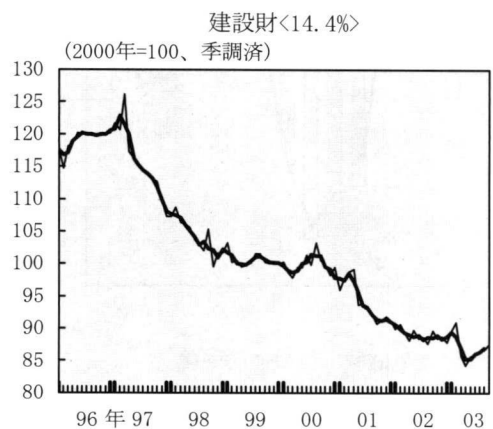
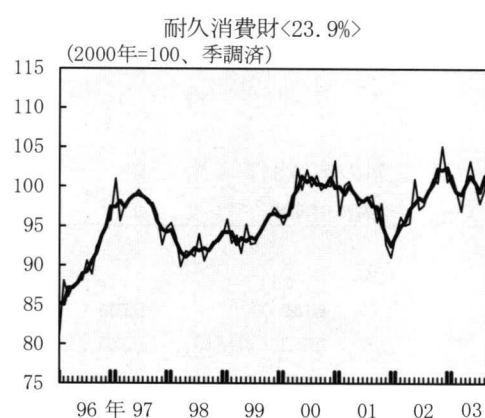
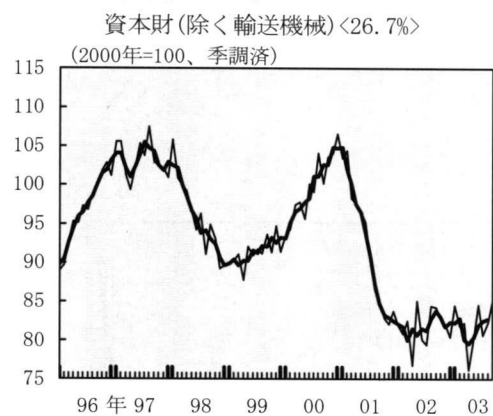
財 別 出 荷

(1) 最終需要財と生産財



(注) < >内は鉱工業出荷に占めるウェイト。

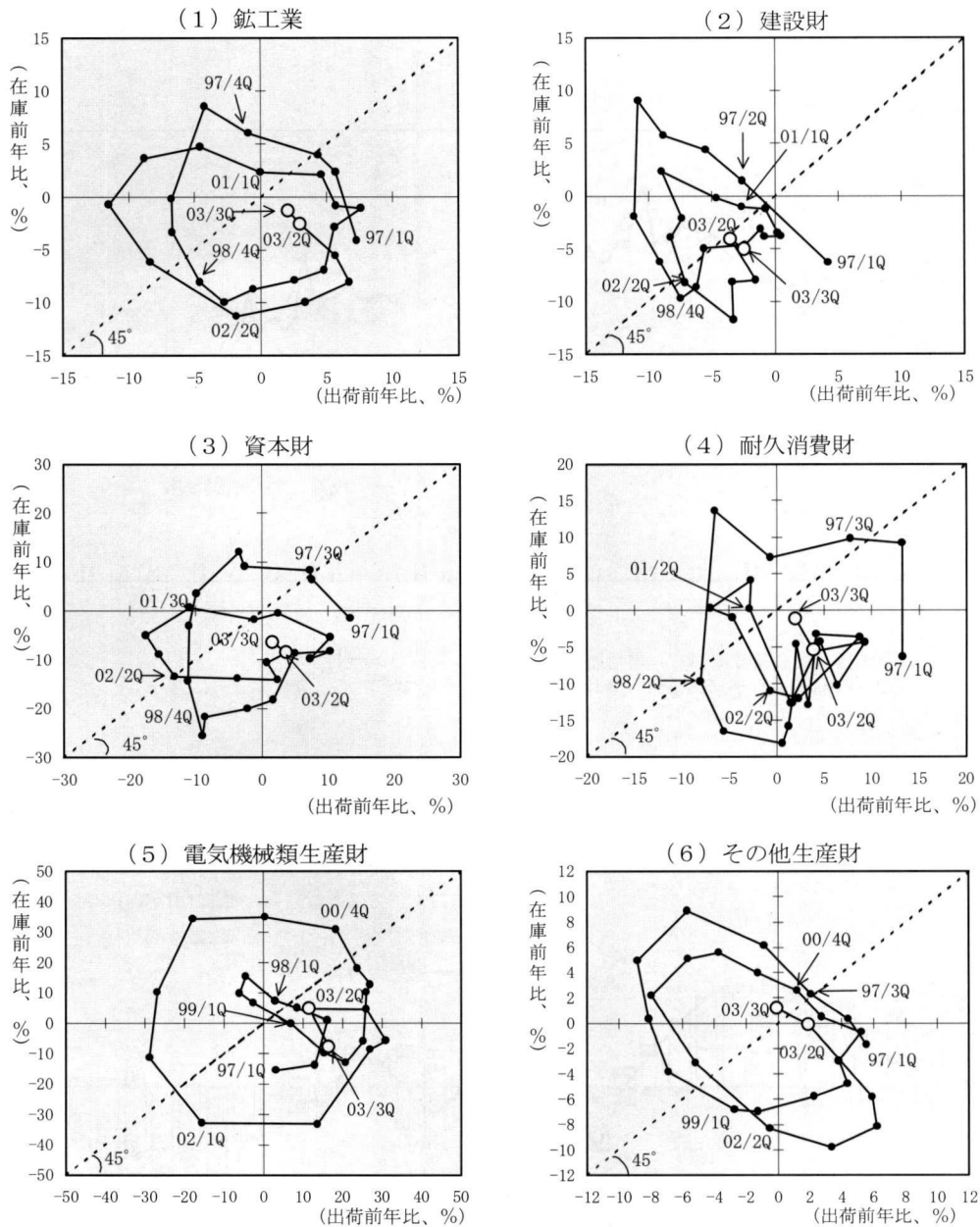
(2) 最終需要財の内訳



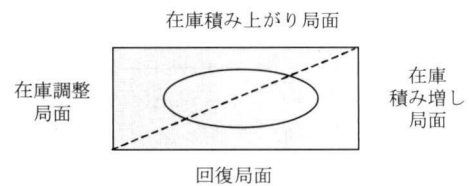
(注) < >内は最終需要財に占めるウェイト。
(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」

（図表 1 6）

在庫循環



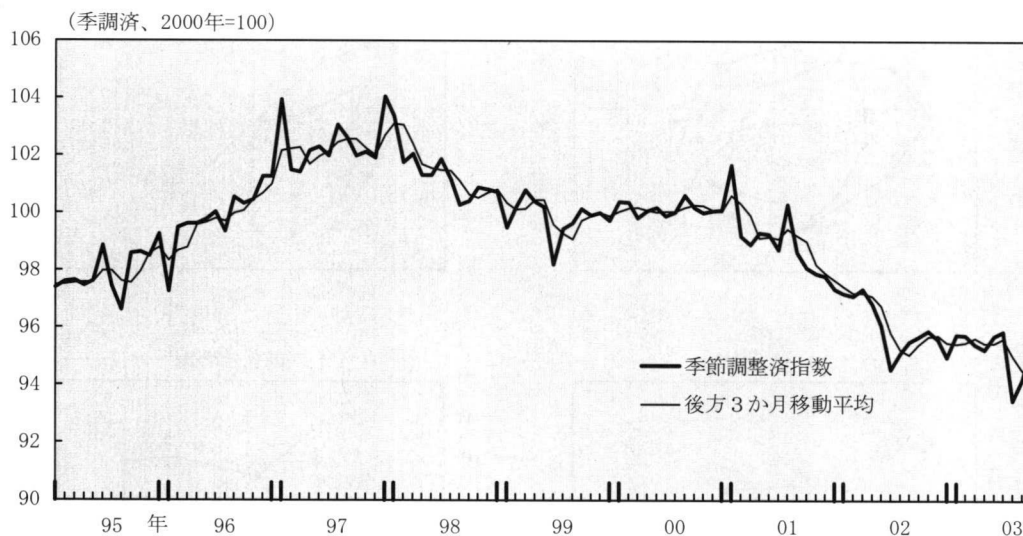
（資料）経済産業省「鉱工業指数統計」



(図表 17)

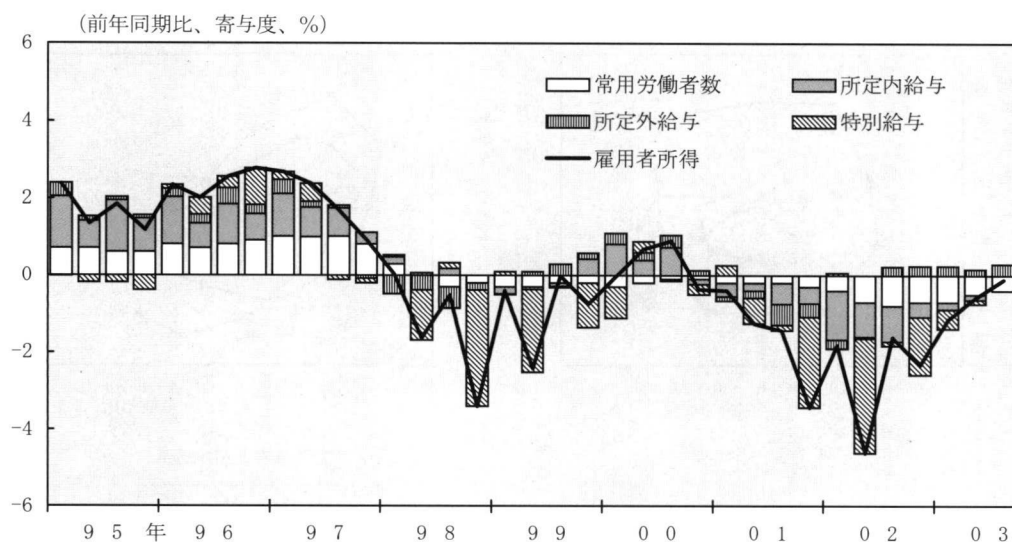
雇用者所得

(1) 所得の推移



- (注) 1. 賃金指数 (現金給与総額) × 常用雇用指数 / 100 とし、日本銀行が算出。
 2. X-12-ARIMAによる季節調整値。毎月季節調整替えを行なうため、計数は過去に遡って毎月改訂される。
 3. 事業所規模5人以上 (下の図表も同じ)。

(2) 所得の内訳



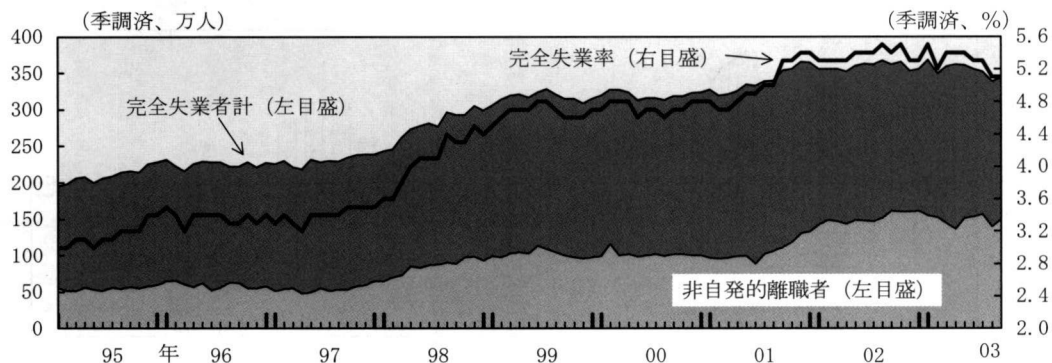
- (注) 1. 第1四半期: 3~5月、第2: 6~8月、第3: 9~11月、第4: 12~2月。
 2. 2003/3Qは2003/9月の前年同月比。

(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」

（図表 18-1）

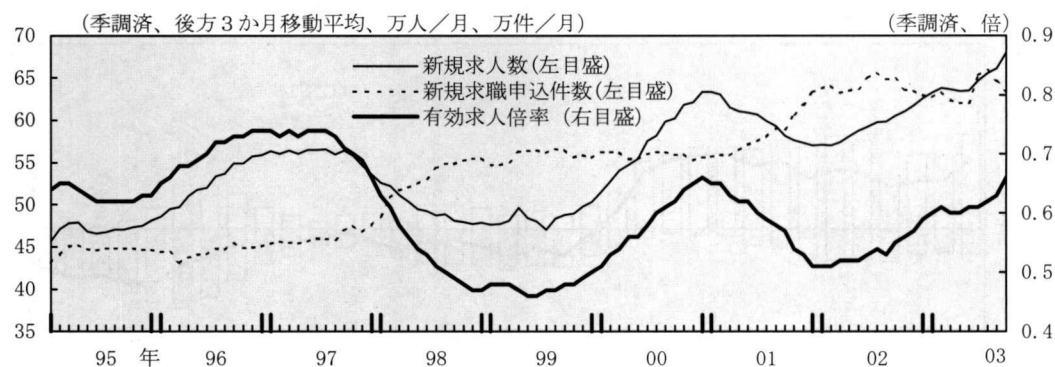
労働需給（1）

（1）完全失業者と失業率



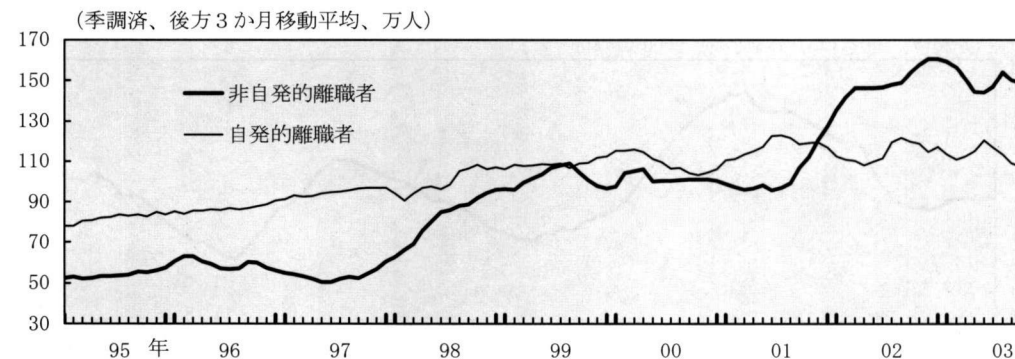
（注）非自発的離職者は、X-11による季節調整値。

（2）有効求人倍率



（注）新規求人数、新規求職申込件数は、新規学卒者を除きパートタイムを含む。

（3）失業者の内訳



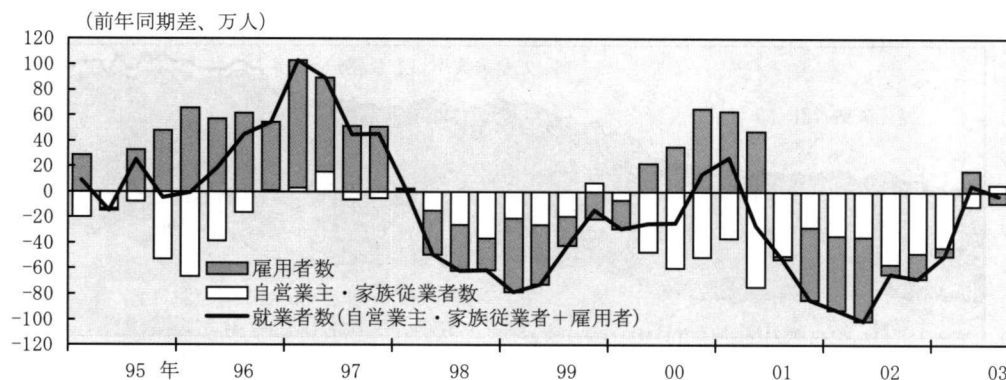
（注）X-11による季節調整値。

（資料）厚生労働省「職業安定業務統計」、総務省「労働力調査」

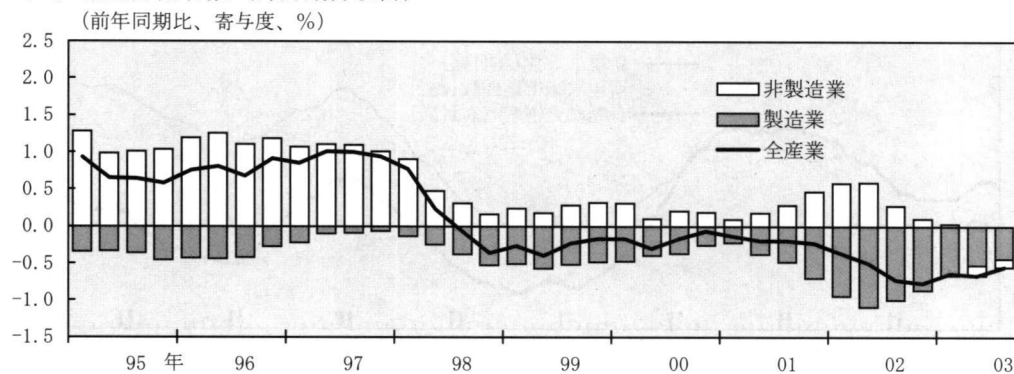
(図表18-2)

労働需給(2)

(1) 雇用者数・就業者数(労働力調査)

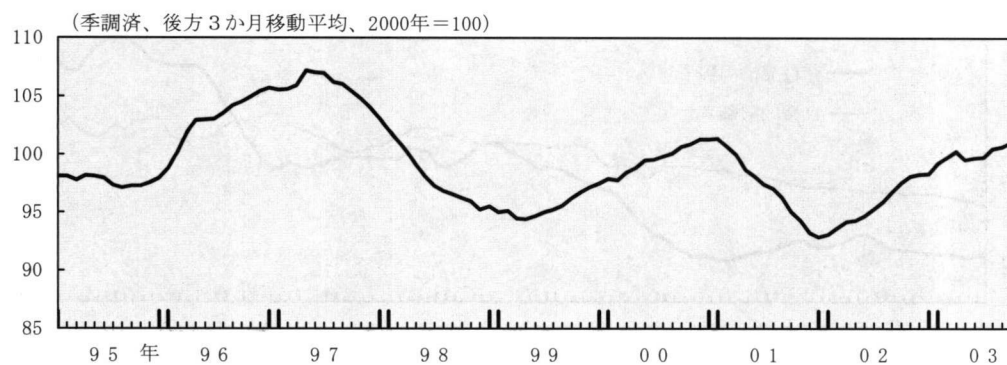


(2) 常用労働者数(毎月勤労統計)



(注) 事業所規模5人以上(下の図表も同じ)。

(3) 所定外労働時間(毎月勤労統計)

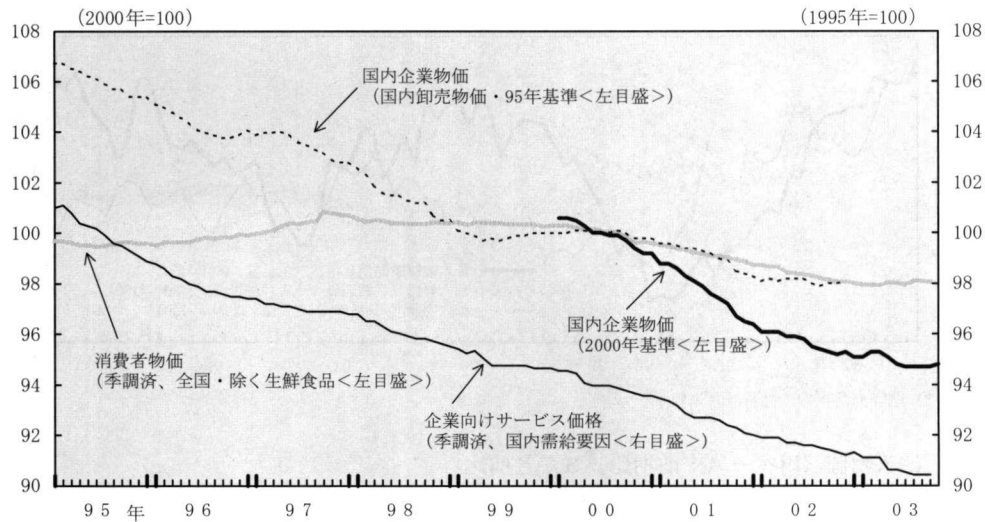


(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」、総務省「労働力調査」

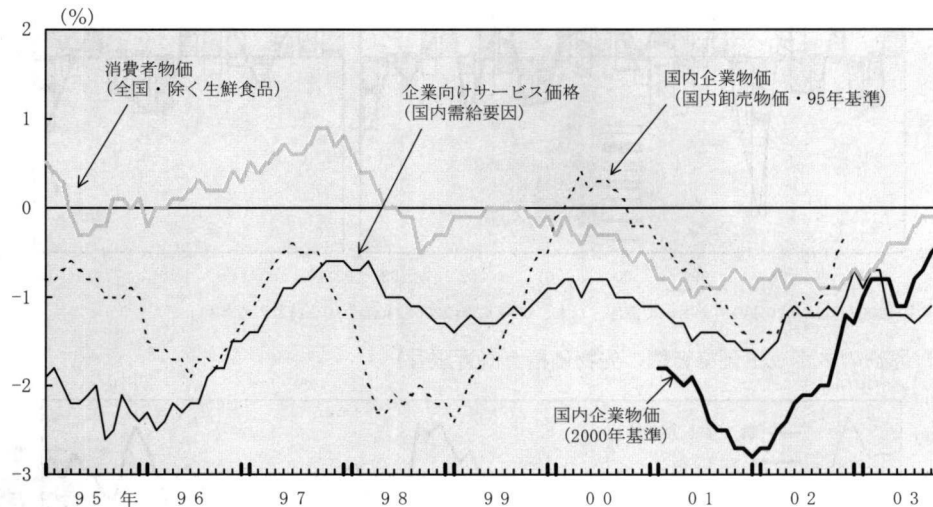
(図表 19)

物 価

(1) 水準



(2) 前年比



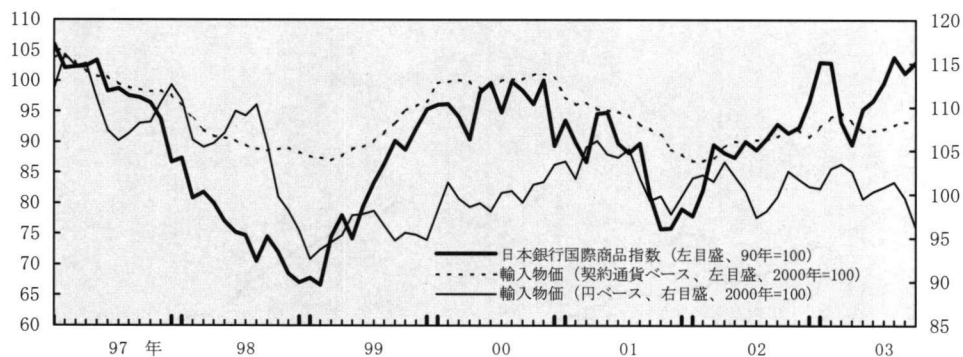
- (注) 1. 消費者物価の(1)の季調済系列は、「外国バック旅行」を除いた上で、X-12-ARIMAにより算出している。2000年基準で新たに採用された「外国バック旅行」については、季節変動が観察されるが、季節調整を行うだけの十分なデータがないため、除いている。
2. (2)の消費者物価・前年比は、2000年12月までは95年基準の指数に基づく。
3. (1)の国内企業物価は、毎年7～9月にかけて適用されている夏季割り増し電力料金の影響を除いている。
4. (1)の国内企業物価(国内卸売物価・95年基準)は、2000年=100となるよう指数水準を調整している。
5. 企業向けサービス価格(国内需給要因)については、図表22の注1を参照。
6. 97/4月以降は消費税率引き上げの影響を除いている(課税品目のすべてについて完全に転嫁されたと仮定して試算)。

(資料) 総務省「消費者物価指数」、日本銀行「企業物価指数」「卸売物価指数」「企業向けサービス価格指数」

(図表20)

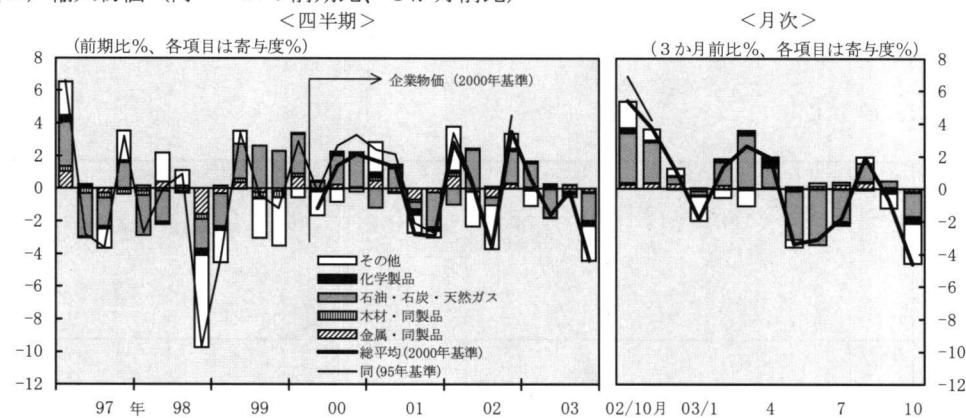
輸入物価と国際商品市況

(1) 輸入物価と国際商品指数



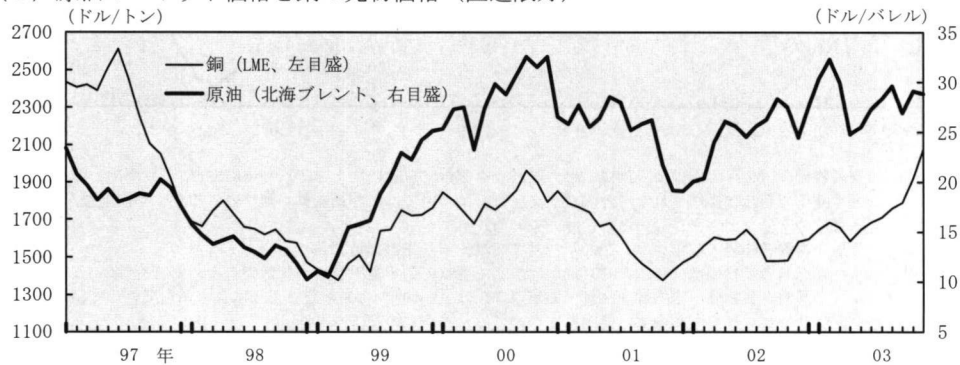
(注) 国際商品指数の計数は月末値。

(2) 輸入物価 (円ベース：前期比、3か月前比)



(注) 2003/4Qは、10月の値を用いて算出。なお、95年基準の2002/4Qは、10～11月の平均値。

(3) 原油のスポット価格と銅の先物価格 (直近限月)



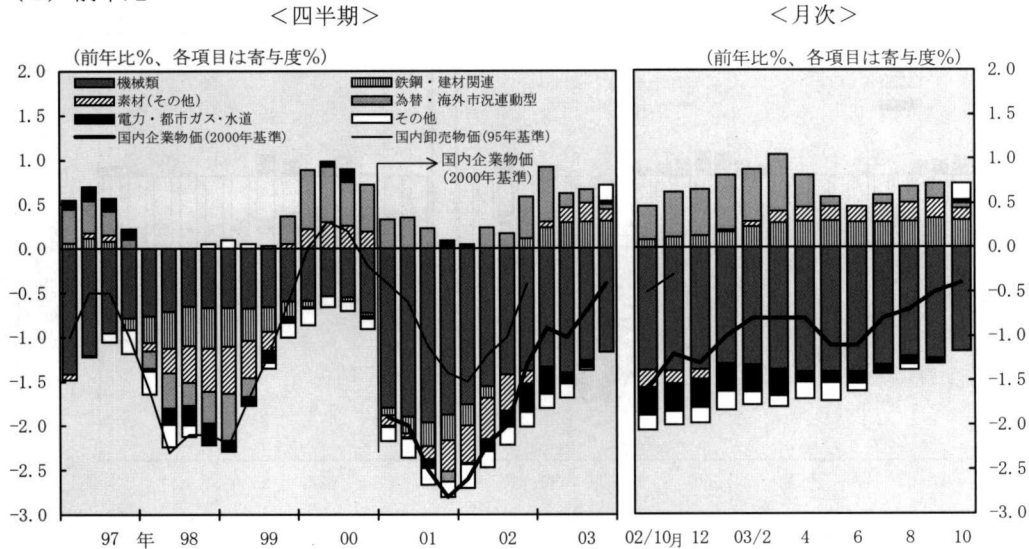
(注) 計数は月中平均。なお、直近11月は19日までの平均値。

(資料) 日本銀行「企業物価指数」「卸売物価指数」「日本銀行国際商品指数」等

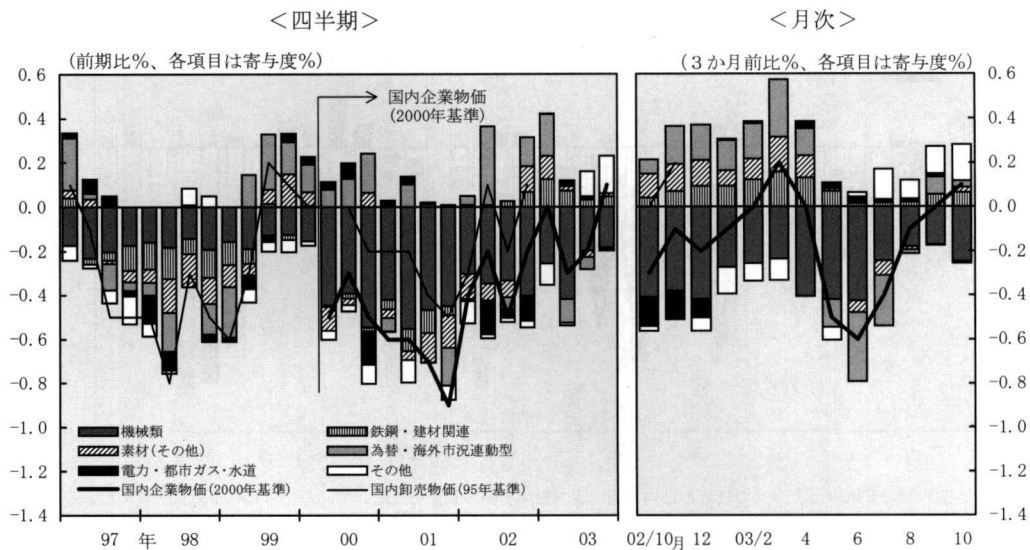
(図表 21)

国内企業物価

(1) 前年比



(2) 前期比、3 か月前比（夏季電力料金調整後）



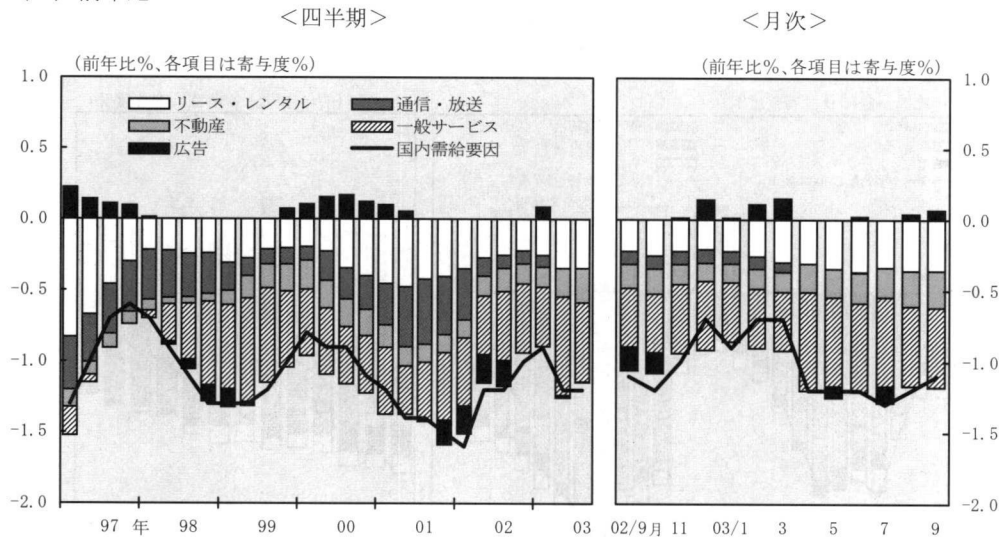
- (注) 1. 機械類：電気機器、一般機器、輸送用機器、精密機器
 2. 鉄鋼・建材関連：鉄鋼、金属製品、窯業・土石製品、製材・木製品、スクラップ類
 3. 素材(その他)：化学製品、プラスチック製品、繊維製品、パルプ・紙・同製品
 4. 為替・海外市況連動型：石油・石炭製品、非鉄金属
 5. その他：加工食品、その他工業製品、農林水産物、鉱産物
 6. (2) は、毎年7～9月にかけて適用されている夏季割り増し電力料金の影響（国内企業物価に対する寄与度は0.2%程度）を除いている。
 7. 97/4月以降は消費税率引き上げの影響を除いている（課税品目のすべてについて完全に転嫁されたと仮定して試算）。
 8. 2003/4Qは、10月の値を用いて算出。なお、国内卸売物価（95年基準）の2002/4Qは、10～11月の平均値。

(資料) 日本銀行「企業物価指数」「卸売物価指数」

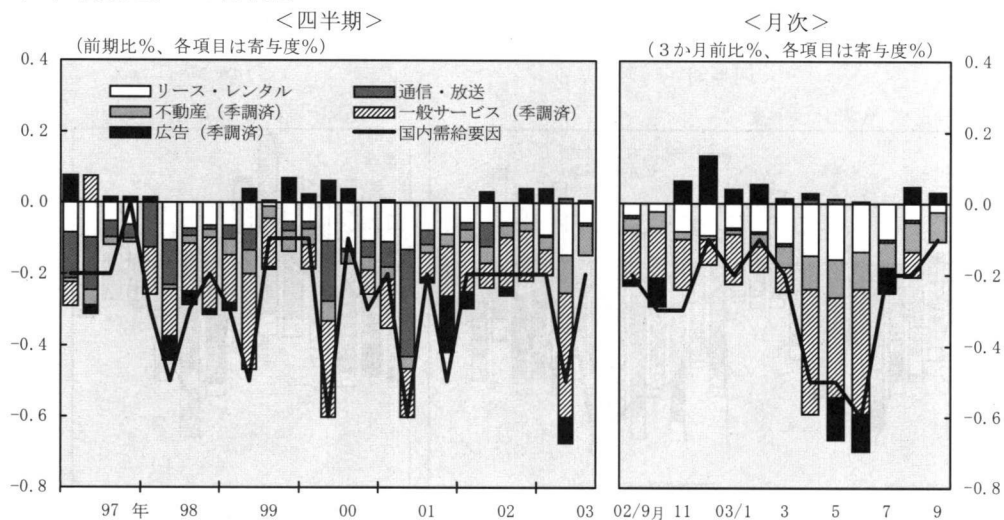
(図表 2 2)

企業向けサービス価格

(1) 前年比



(2) 前期比、3 か月前比



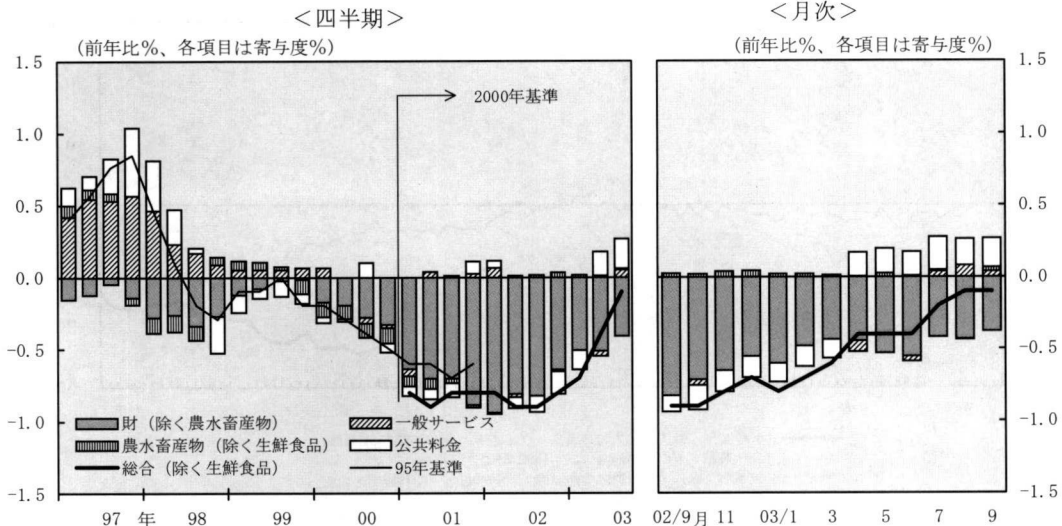
- (注) 1. 国内需給要因とは、月々の価格の動向が主に国内民間需要の動向を反映しているとみられる品目を集めたもの。具体的には、総平均から、①規制料金（自動車保険＜自賠責＞、鉄道旅客、バス、タクシー、国内航空旅客、有料道路、郵便、下水道）、②海外要因（外洋貨物輸送、国際航空貨物、国際航空旅客）、③単月の振れが大きく、短期的な需給動向を反映しているとは必ずしも言い難い証券関連手数料（企業が社債発行に伴い銀行に支払う事務代理手数料等＜証券引受事務手数料等は含まない＞）を除いたものを国内需給要因とみなした。
2. 一般サービスは、国内需給要因に含めたものから、広告、不動産、リース・レンタル、通信・放送を差し引いたもの。具体的には、金融・保険、運輸、情報サービス、建物サービス、労働者派遣サービス、機械修理等。
3. 前期比、3 か月前比は、広告中のテレビコマーシャル、一般サービス中の普通倉庫、不動産中の店舗について、X-12-ARIMA による季節調整を施した上で計算。季節調整替えを毎月行うため、これらの計数および国内需給要因については、過去に遡って毎月改訂される。
4. 97/4月以降は消費税率引き上げの影響を除いている（課税品目のすべてについて完全に転嫁されたと仮定して試算）。

(資料) 日本銀行「企業向けサービス価格指数」

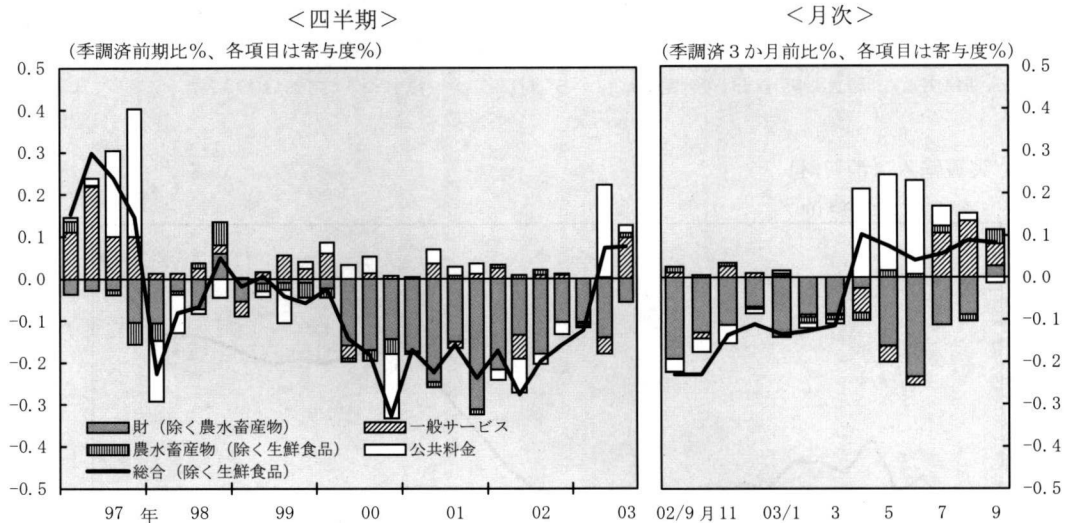
（図表 2 3）

消費者物価

（1）前年比



（2）前期比、3 か月前比（2000年基準：除く外国バック旅行）



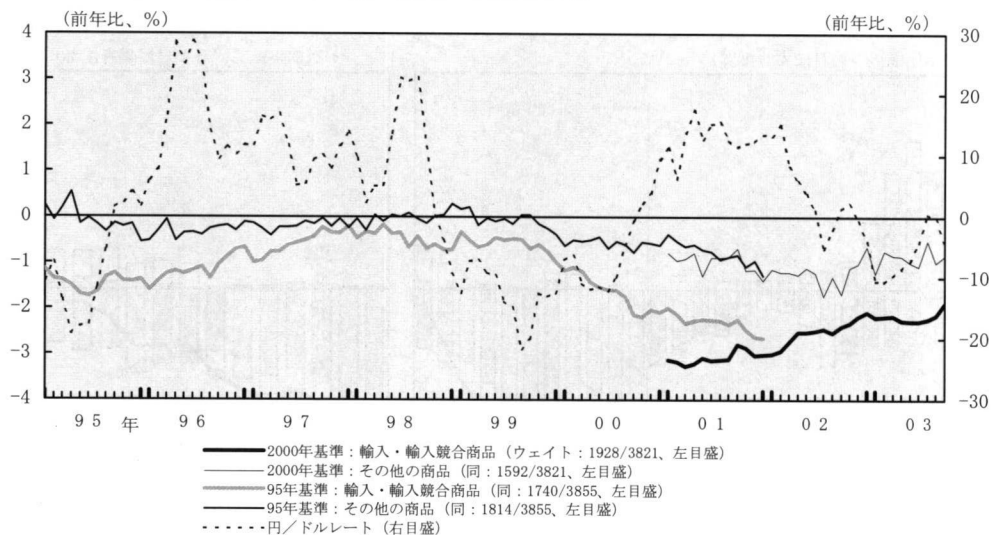
- （注）1. 分類は、原則、総務省に則している。但し、財は総務省公表の「財」から「電気・都市ガス・水道」を引いたもの。公共料金は「公共サービス」と「電気・都市ガス・水道」を足したもので定義した。
2. 前期比、3 か月前比は、X-12-ARIMA による季節調整値。但し、「総合（除く生鮮食品）」および「一般サービス」からは、「外国バック旅行」を除いた上で季節調整を行っている。2000年基準で新たに採用された「外国バック旅行」については、季節変動が観察されるが、季節調整を行うだけの十分なデータがないため、除いている。なお、合計と項目別の積み上げが完全に一致しないのは、季節調整の誤差による。
3. 97/4月以降は消費税率引き上げの影響を除いている（課税品目のすべてについて完全に転嫁されたと仮定して試算）。

（資料）総務省「消費者物価指数」

(図表 2 4)

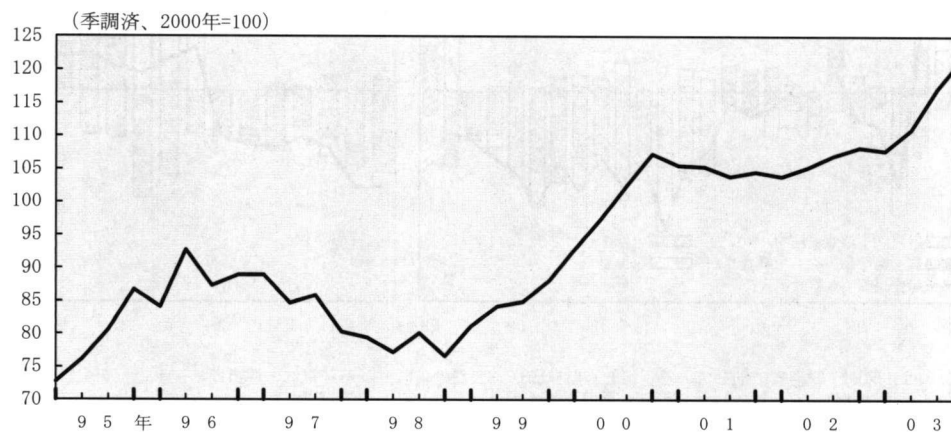
消費者物価（輸入・輸入競合商品）

(1) 輸入・輸入競合商品とその他の商品の消費者物価



- (注) 1. 輸入・輸入競合商品とは、輸入品および国内品でも輸入品と競合関係にあると判断される品目を集めたもの。具体的には、輸入物価指数と消費者物価指数に共通に採用されている品目を取り出した。但し、輸入物価指数に採用されていなくても、輸入品と競合関係にあると判断される品目は、一部追加的に取り出している。
2. 当図表で扱っている商品は、原油市況の影響を大きく受ける石油製品と農水畜産物を除いたもの。グラフの凡例中のウェイトは、財（除く農水畜産物）に対するもの。
3. 趨勢的な変化をみるため、95年基準の輸入・輸入競合商品の中からたばこ増税分（98/12月、03/7月）およびバスケット（98年秋から99/1月にかけての銘柄変更による価格変化が顕著）を除去した。
4. 97/4月以降は消費税率引き上げの影響を除いている（課税品目のすべてについて完全に転嫁されたと仮定して試算）。

(2) 実質輸入（消費財）



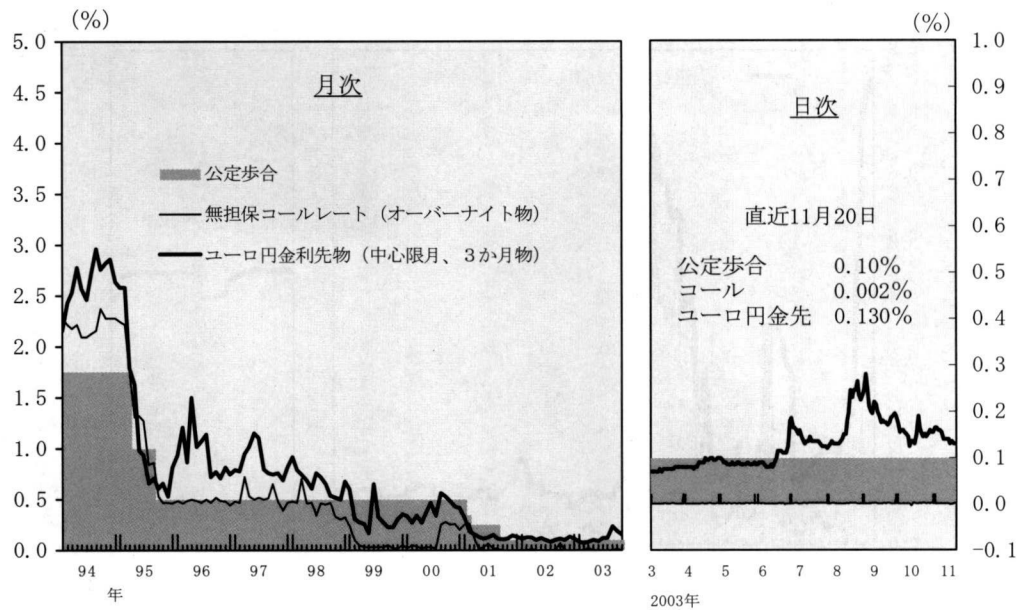
- (注) 1. 実質輸入（消費財）は、通関統計から作成した実質輸入（消費財）を2000年=100として指数化したもの。但し、実質輸入（消費財）は、自動車、音響映像機器、事務用機器、食料品、繊維製品を合成したもの。
2. 2003/4Qは、10月の値。

(資料) 総務省「消費者物価指数」、財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

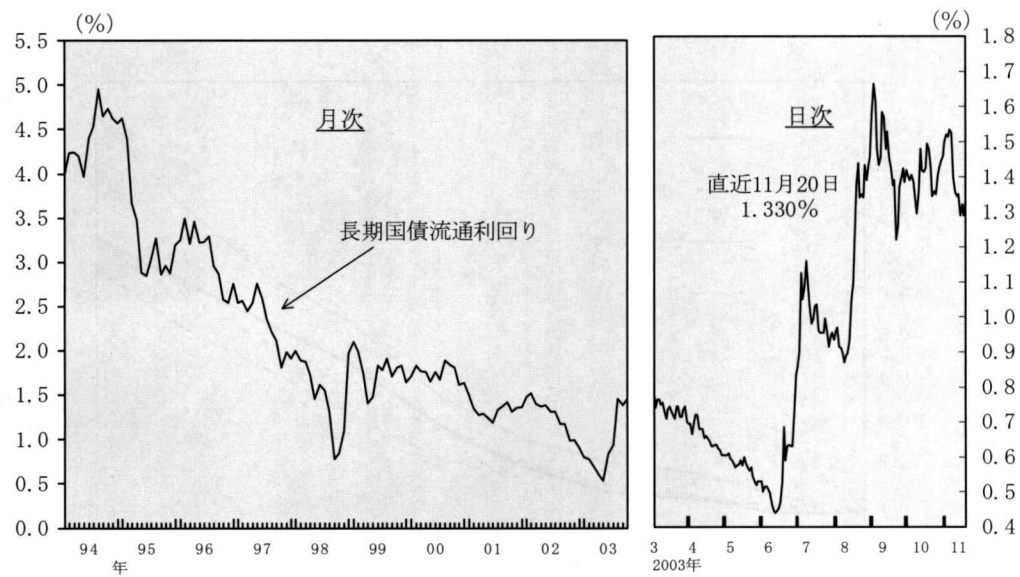
(図表 25)

市場金利等

(1) 短期



(2) 長期



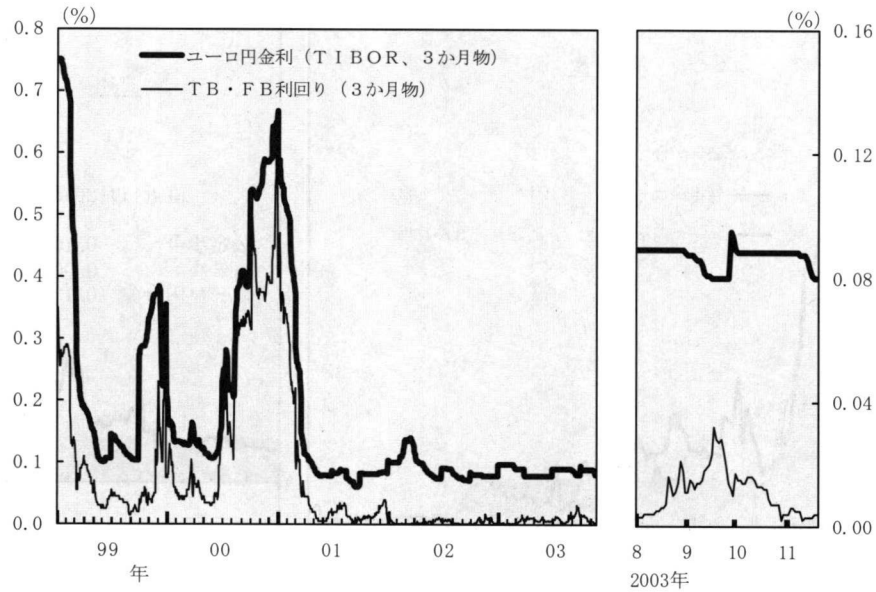
(注) 長期国債流通利回りは10年新発債。ただし、98年11月以前は10年上場最長期物。

(資料) 日本銀行、東京金融先物取引所、日本相互証券

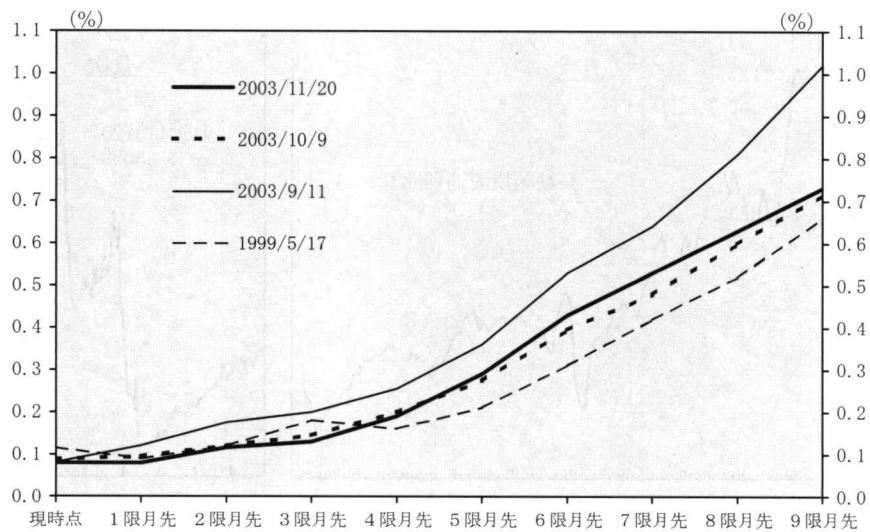
(図表 26)

短期金融市場

(1) ターム物金利



(2) ユーロ円金利先物 (3 か月)

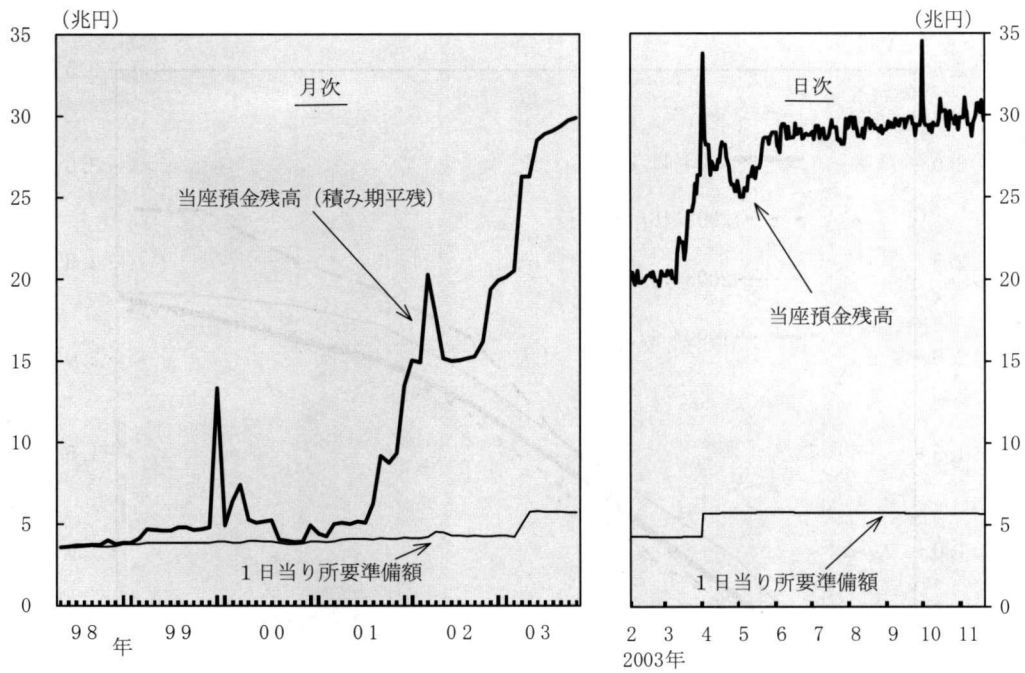


(注) 限月には、3月、6月、9月、12月のみを採用。

(資料) 全国銀行協会、日本相互証券、東京金融先物取引所

（図表 2 7）

日銀当座預金残高

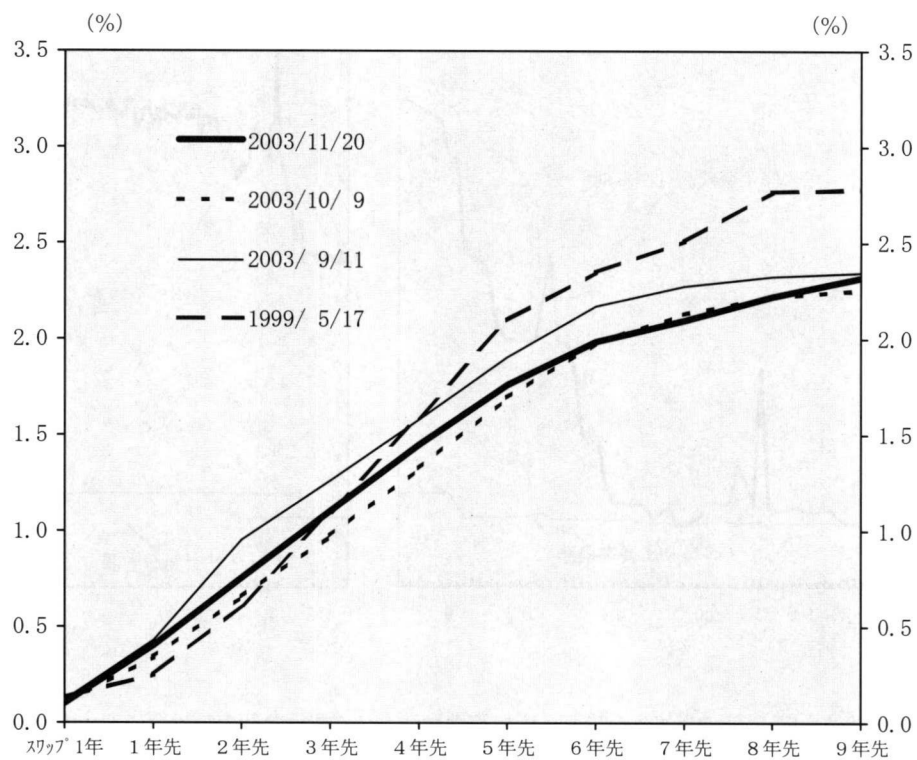


（注）2003年4月1日以降の当座預金残高・所要準備額は、日本郵政公社の預け金に関する計数を含む。

（資料）日本銀行

(図表 28)

長期金利の期間別分解



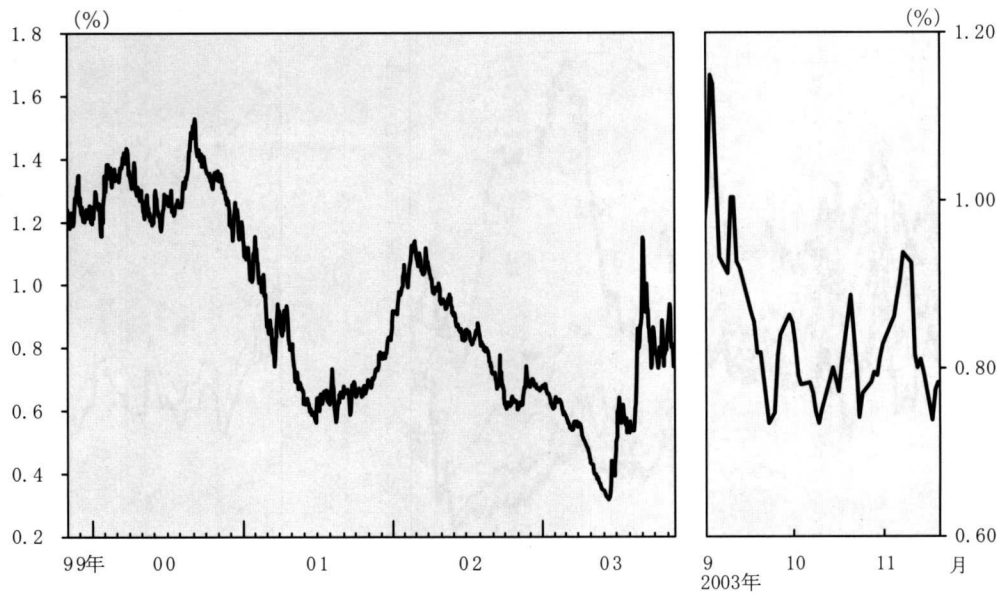
(注) 1年物インプライド・フォワード・レート。円-円スワップ・レートから算出。

(資料) 共同通信社

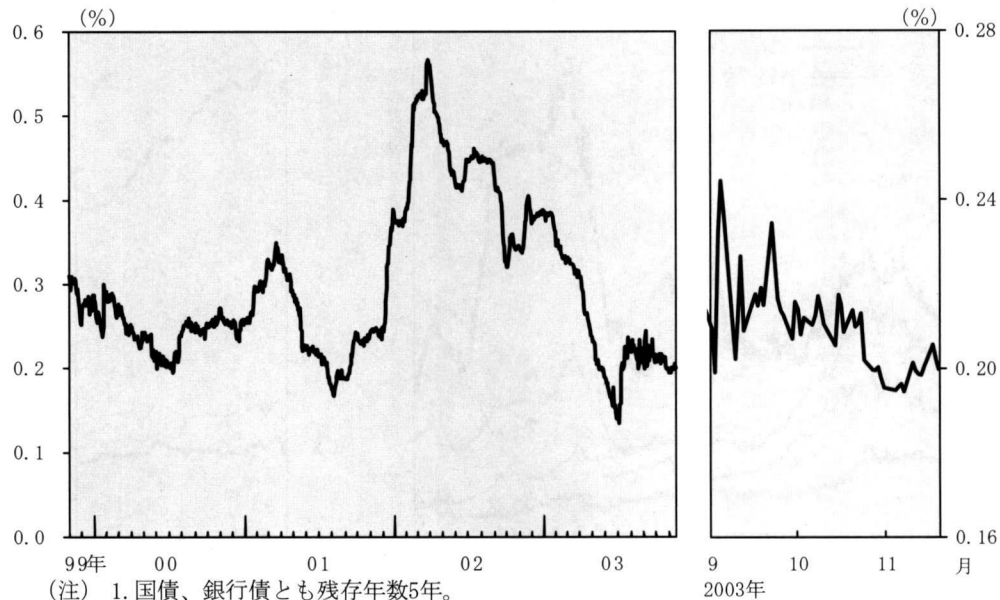
（図表 29）

銀行債流通利回り

（1）銀行債流通利回り（5 年新発）



（2）利回り格差（銀行債流通利回り－国債流通利回り）



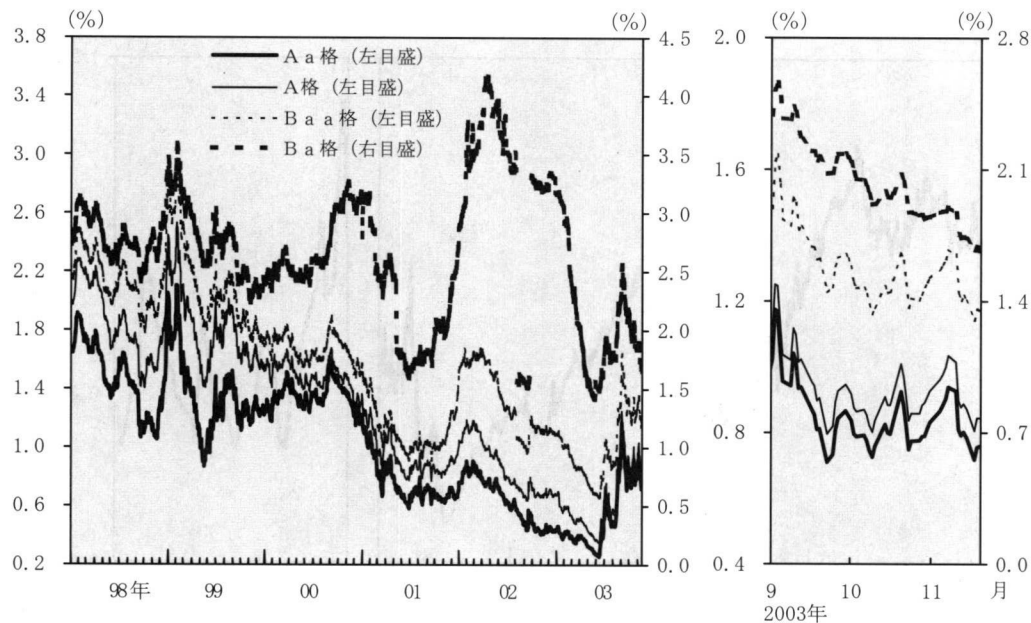
（注） 1. 国債、銀行債とも残存年数5年。

2. 銀行債は、みずほコーポレート債・東京三菱債・三井住友債・UFJ債の平均。

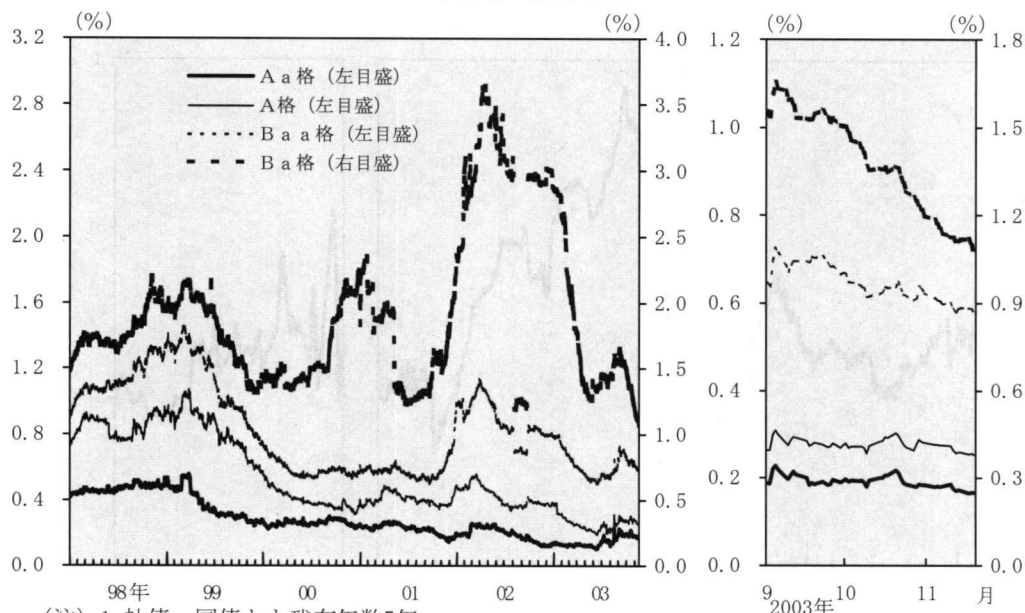
（資料） 日本証券業協会「公社債店頭（基準）気配表」「公社債店頭売買参考統計値」

社債流通利回り

(1) 社債流通利回り



(2) 利回り格差（社債流通利回り－国債流通利回り）



(注) 1. 社債、国債とも残存年数5年。

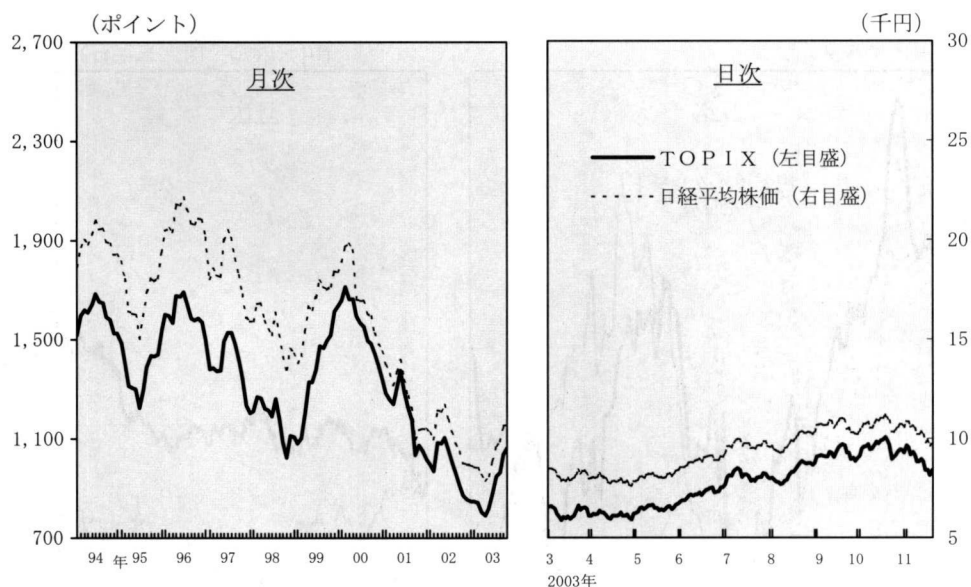
2. 社債利回りは日本証券業協会公表の気配値、格付けはムーディーズによる。

(資料) 日本証券業協会「公社債店頭（基準）気配表」「公社債店頭売買参考統計値」

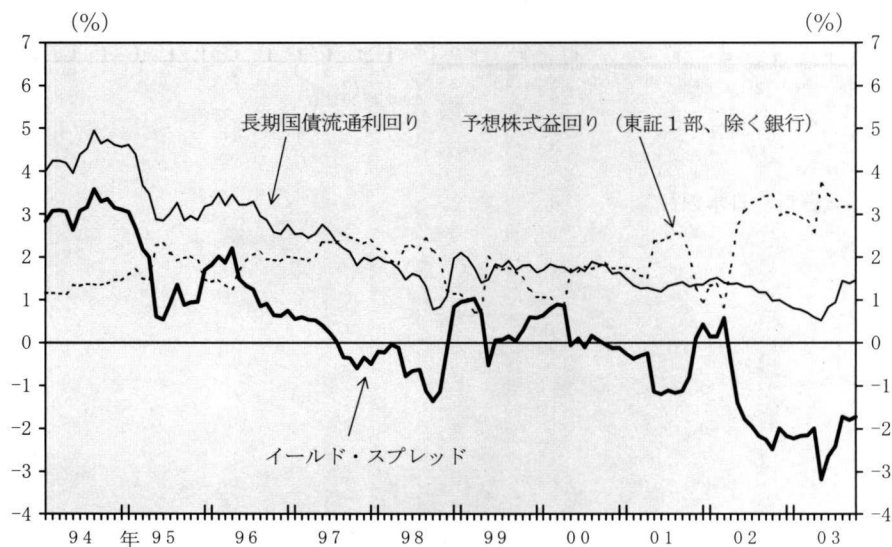
（図表 3 1）

株 価

（1）株式市況



（2）イールド・スプレッド

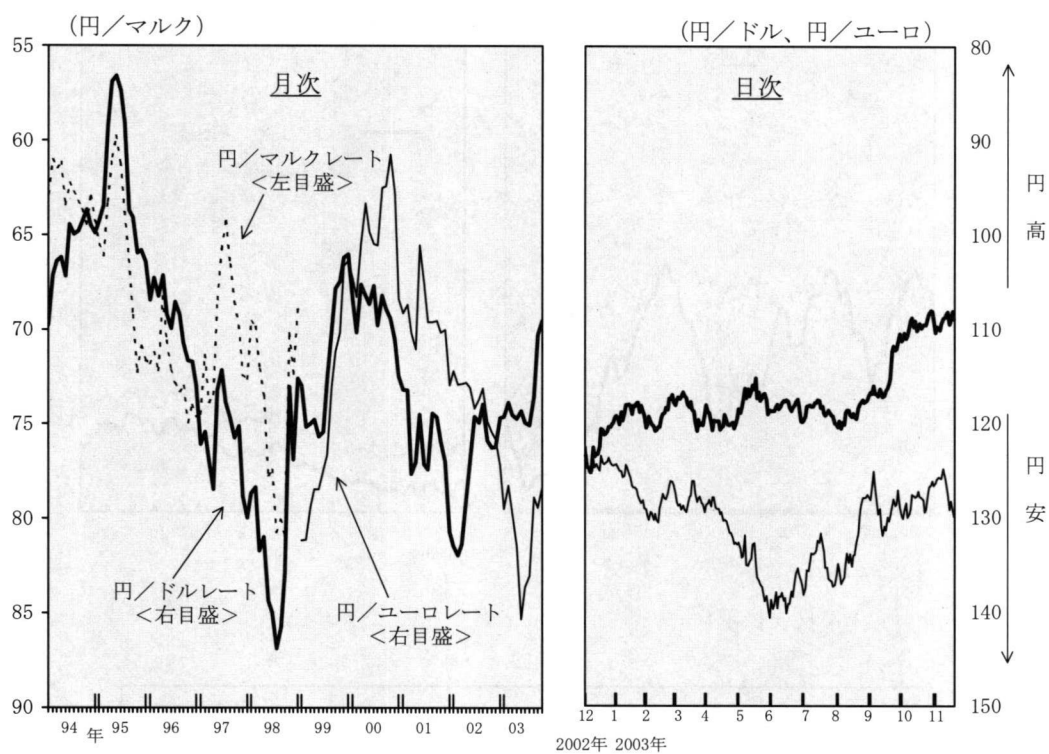


- （注）1. イールド・スプレッド＝長期国債流通利回り－予想株式益回り
 予想株式益回り＝1／予想PER
 2. 予想株式益回り（単体ベース）は大和総研調べ。
 3. 長期国債流通利回りは10年新発債。ただし、98年11月以前は10年上場最長期物。

（資料）日本経済新聞社「日本経済新聞」、大和総研「大和投資資料」

(図表 3 2)

為替レート

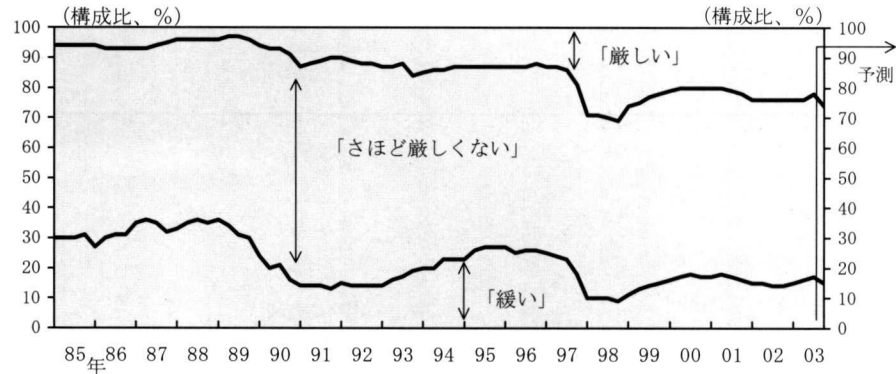


(資料) 日本銀行

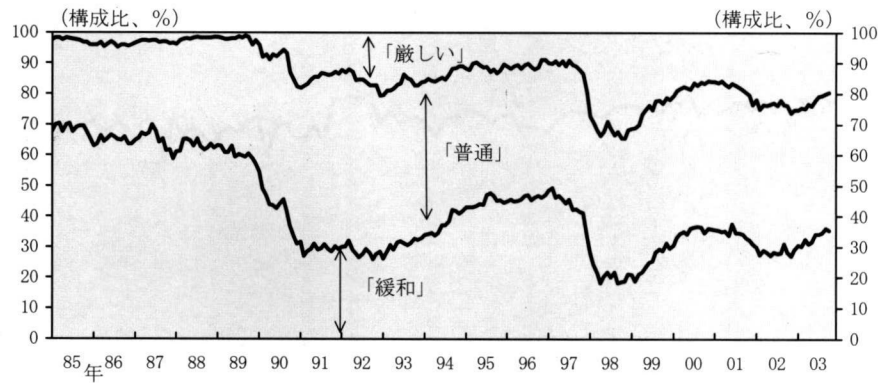
(図表 3 3)

中小企業からみた金融機関の貸出態度

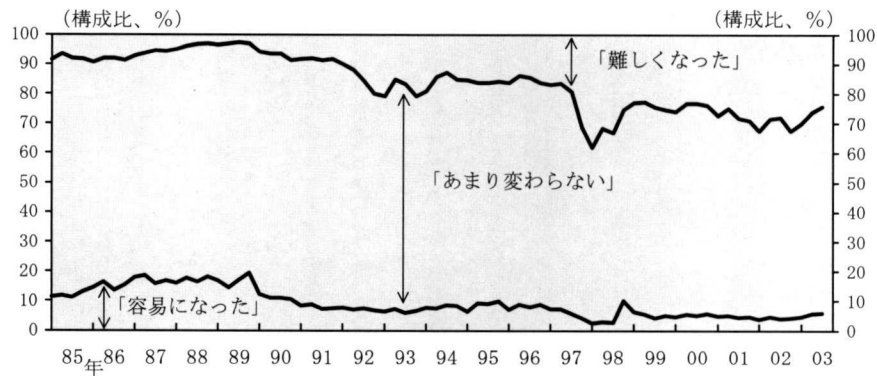
(1) 日本銀行・企業短期経済観測調査（直近調査時点9月）



(2) 中小企業金融公庫・中小企業景況調査（直近調査時点10月中旬）



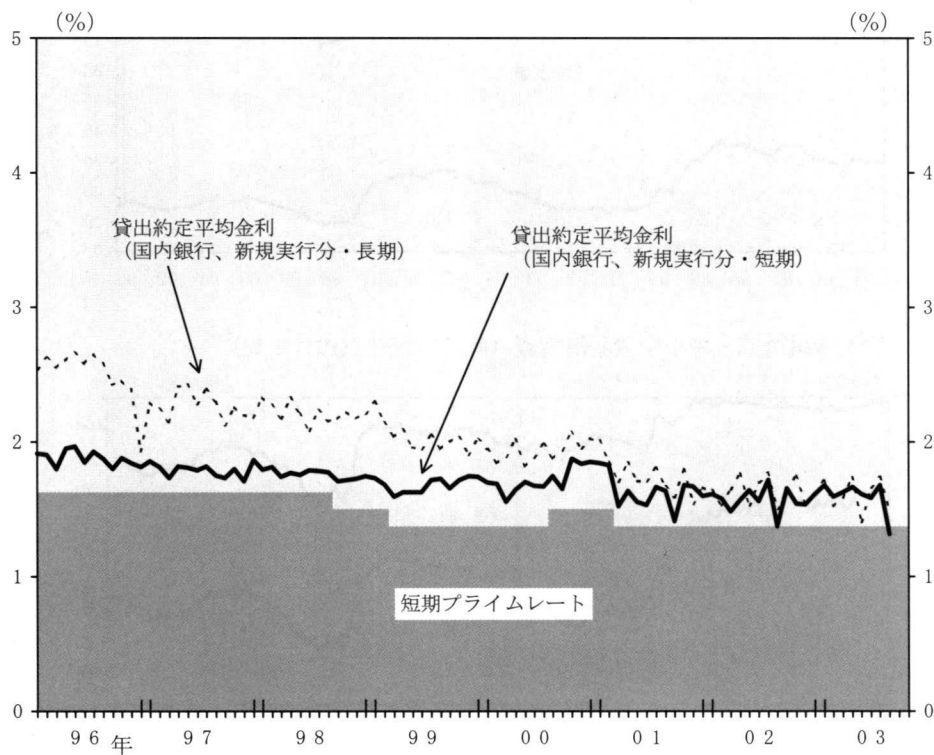
(3) 国民生活金融公庫・全国小企業動向調査（直近調査時点9月10日）



(資料) 日本銀行「企業短期経済観測調査」、中小企業金融公庫「中小企業景況調査」、国民生活金融公庫「全国小企業動向調査」

(図表 3 4)

貸出金利

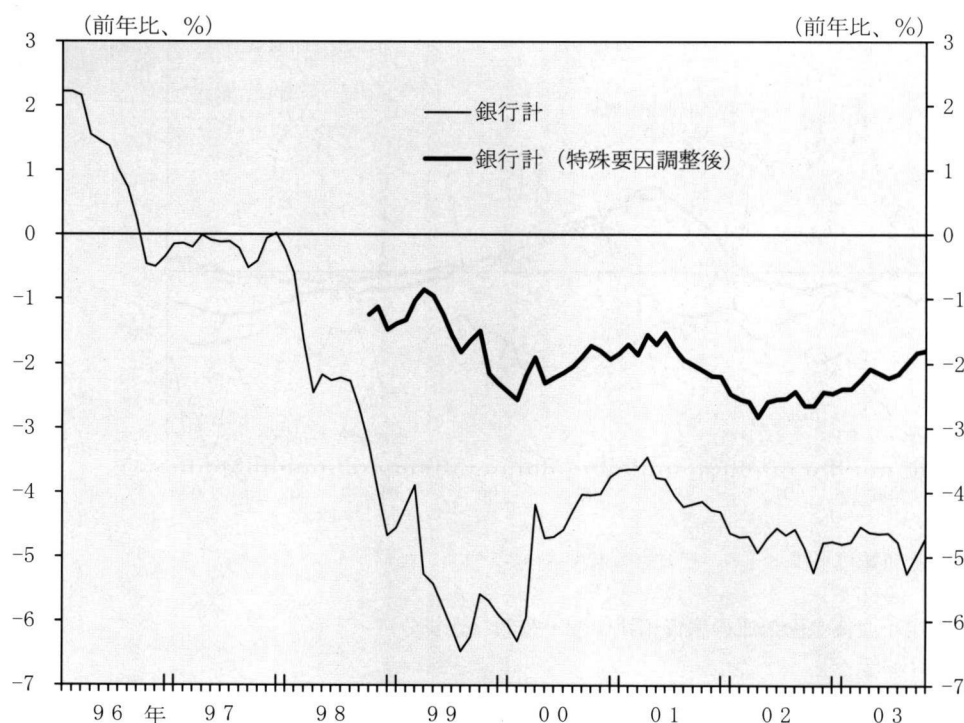


(注) 短期プライムレートは月末時点。

(資料) 日本銀行

（図表 3 5）

民間銀行貸出



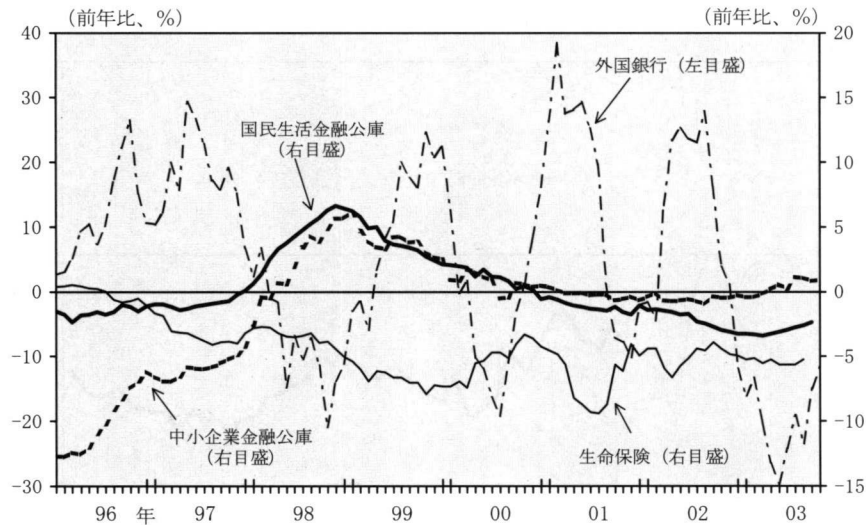
- (注) 1. 総貸出平残ベース。
 2. 銀行計は、都市銀行、長期信用銀行、信託銀行、地方銀行、地方銀行Ⅱの合計。
 3. 特殊要因調整後計数は、貸出の実勢をみるため、①貸出債権の流動化による変動分、②為替相場変動による外貨建貸出の円換算額の変動分、③貸出債権の償却による変動分、④旧国鉄清算事業団向け貸出の一般会計への承継分、および⑤旧住宅金融債権管理機構向け貸出の整理回収機構向け貸出への振り替わり分を調整したもの。あくまでも種々の前提に基づく試算であり、試算結果については幅を持つてみる必要がある。

(資料) 日本銀行「貸出・資金吸収動向等」

(図表 3 6)

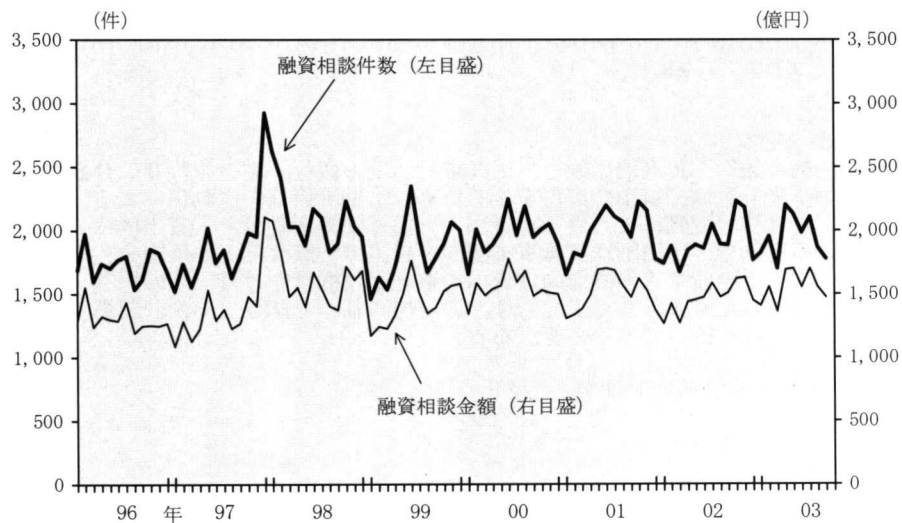
その他金融機関貸出

(1) その他金融機関貸出



(注) 外銀は平残ベース。その他は末残ベース。

(2) 中小企業金融公庫の融資相談件数・金額 (直貸分)

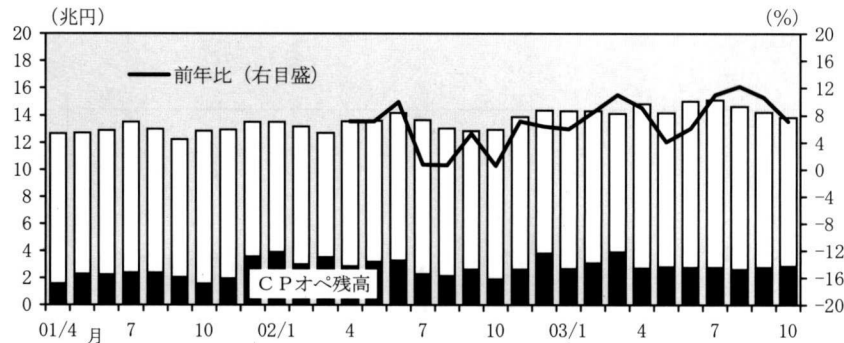


(資料) 日本銀行「金融経済統計月報」、中小企業金融公庫「業務概況」

(図表 37)

資本市場調達

(1) CP 発行残高 (末残)



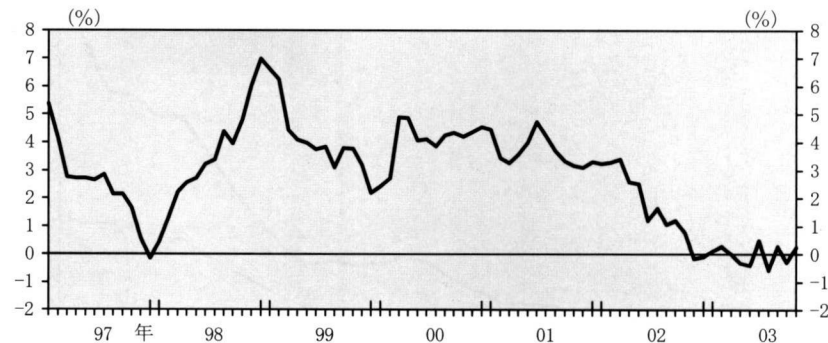
- (注) 1. 日本銀行と当座取引のある銀行・証券会社の引受けによるもの。
2. 銀行発行分を含まない。

(2) 社債発行額

	(億円)					
	03/1~3月	4~6月	7~9月	03/8月	9月	10月
発行額	31,861	33,304	29,144	9,477	12,536	6,610
(前年)	(28,284)	(27,604)	(28,503)	(5,123)	(13,710)	(5,237)

- (注) 1. 国内、海外で発行された普通社債、転換社債型新株予約権付社債、新株予約権付社債および国内で発行された資産担保債券の合計。
2. 国内で発行された普通社債については、銀行発行分を含まない。
3. 直近月分は、国内私募分に推定値を用いており、速報値。

(3) 社債発行残高 (末残前年比)



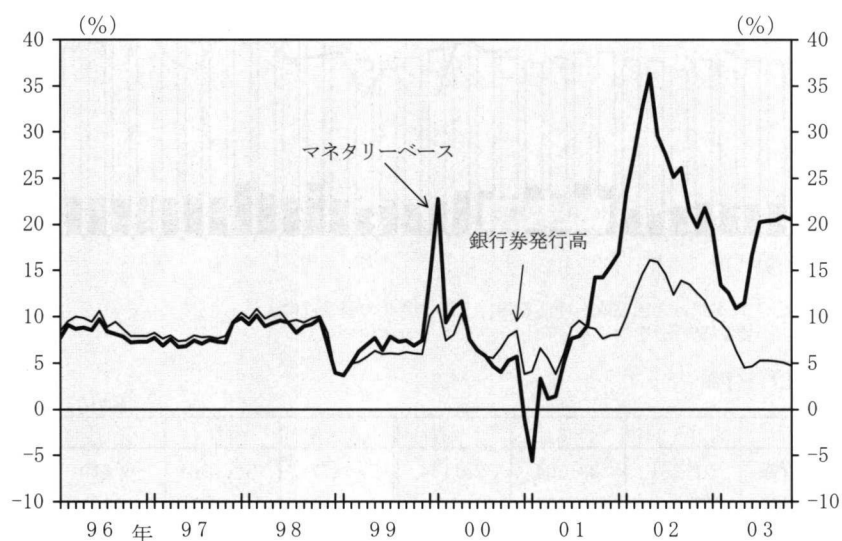
- (注) 社債発行残高の前年比は以下の前提のもとで計算した推定値である。
① 国内、海外で発行された普通社債、転換社債型新株予約権付社債、新株予約権付社債および資産担保債券の合計値。
② 銀行発行分を含む。
③ 社債発行残高前年比の計算に当たっては、以下の方法で、株式に転換された転換社債型新株予約権付社債の分を調整する。
発行残高前年比 = (当月の社債発行残高 + 過去1年間に株式に転換された分の合計額) ÷ 前年同月の社債発行残高
④ 直近月分の計算では、国内私募分にも推定値を用いており、速報値。

(資料) 日本銀行「貸出・資金吸収動向等」、「国際収支統計月報」、
日本証券業協会「公社債発行額・償還額」、「本邦外債発行額」、「起債情報」、
アイ・エヌ情報センター「Funding Eye」

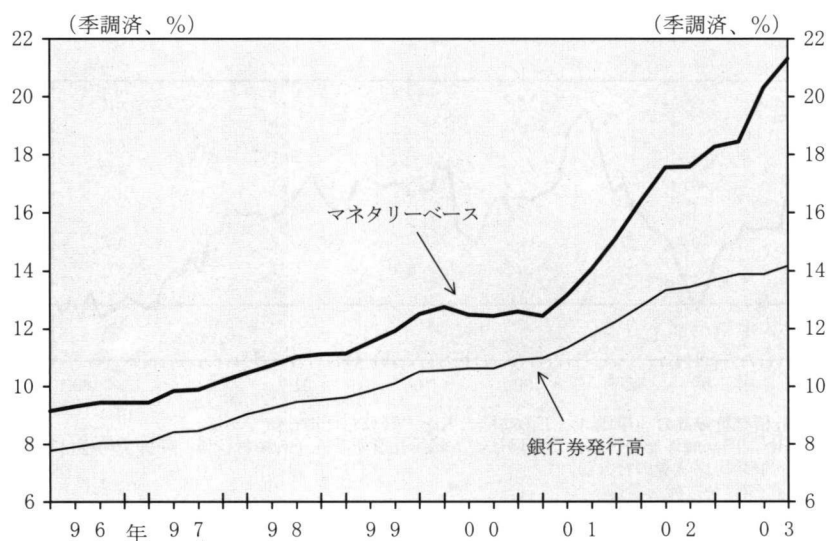
(図表38)

マネタリーベース

(1) 前年比



(2) 対名目GDP比率



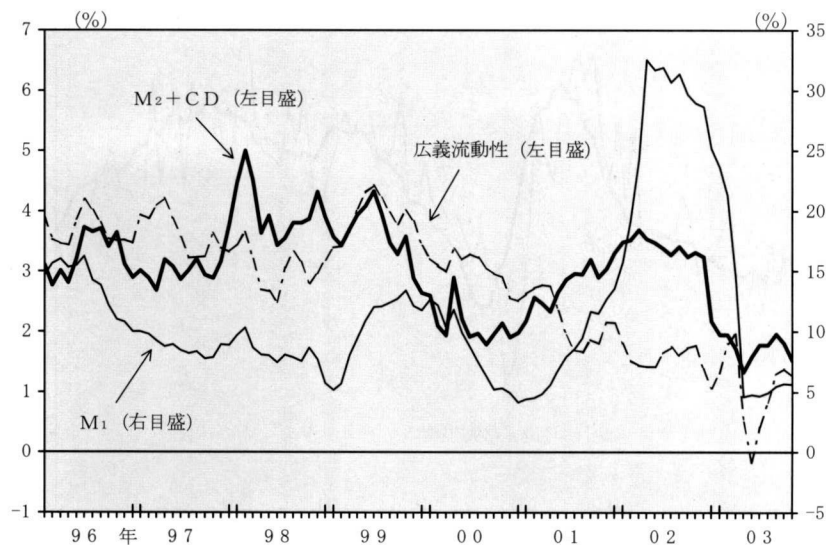
(注) マネタリーベース＝流通現金（銀行券および貨幣とともに金融機関保有分を含む）＋日銀当座預金

(資料) 内閣府「国民経済計算」、日本銀行

(図表39)

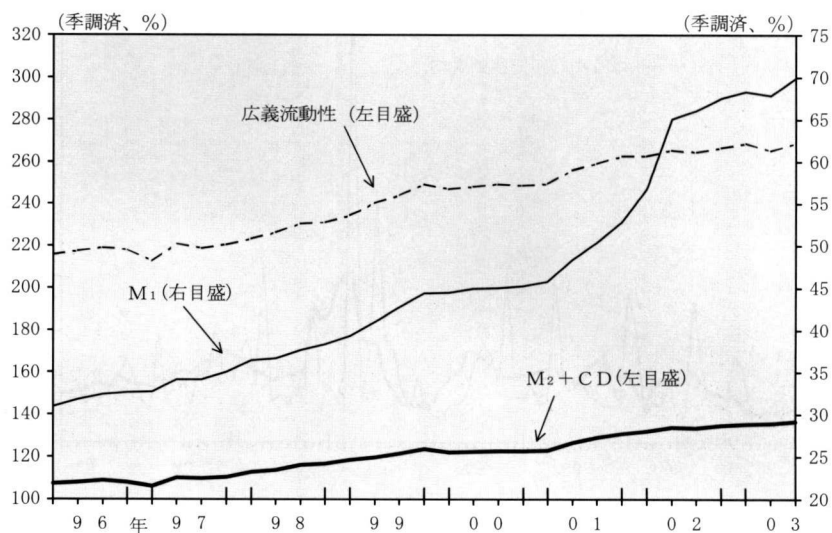
マネーサプライ (M1、M2 + CD、広義流動性)

(1) 前年比



(注) 2003年4月に簡易保険福祉事業団が解散し、その資産等が日本郵政公社に承継されたことに伴い、同事業団の保有する金融資産が集計対象外となった。
当該要因調整後の広義流動性の前年比伸び率：2003年10月+3.4%。

(2) 対名目GDP比率

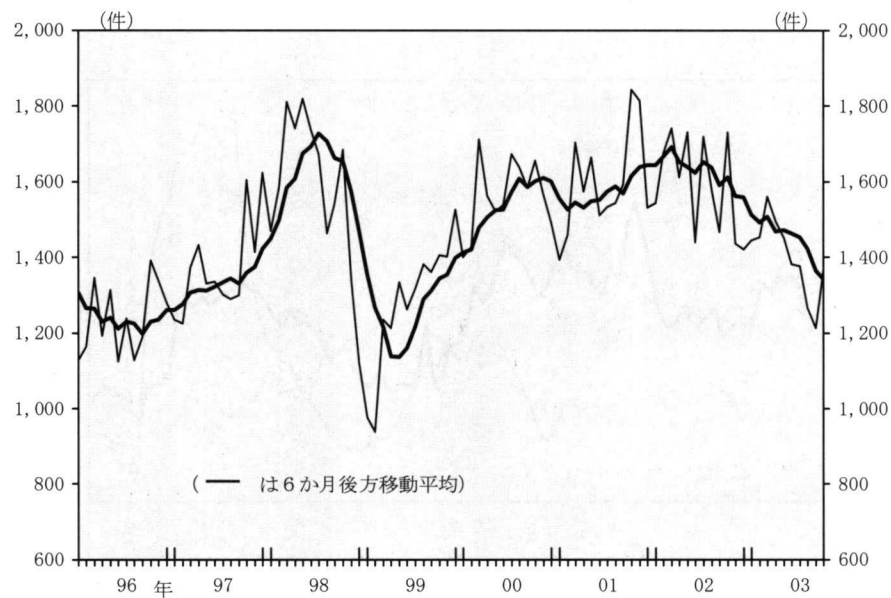


(資料) 内閣府「国民経済計算」、日本銀行

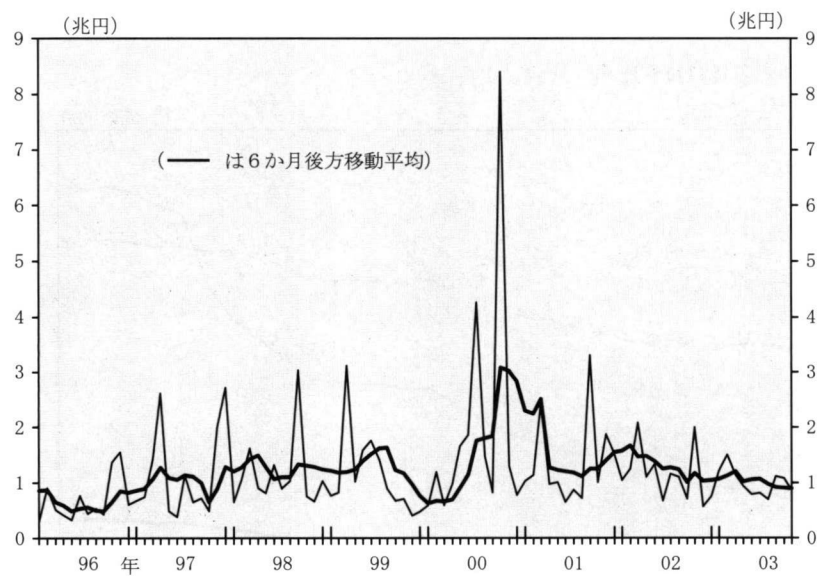
(図表40)

企業倒産

(1) 倒産件数



(2) 倒産企業負債金額

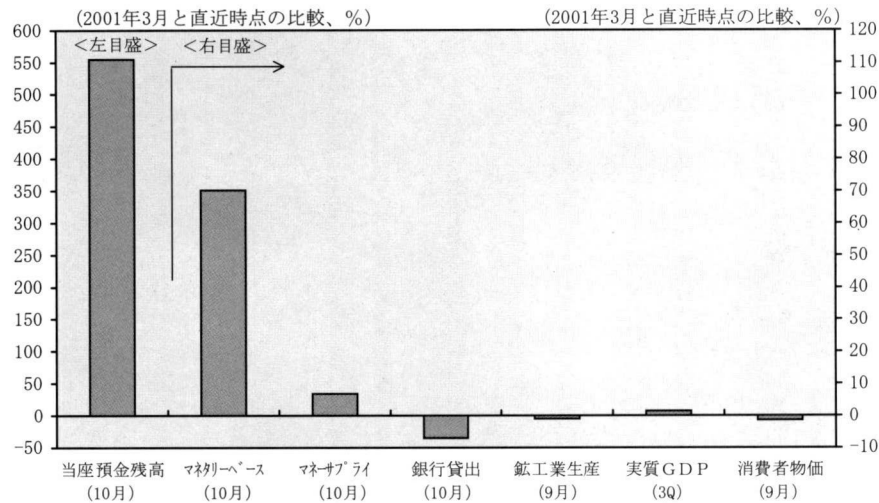


(資料) 東京商工リサーチ「倒産月報」

（図表 4 1）

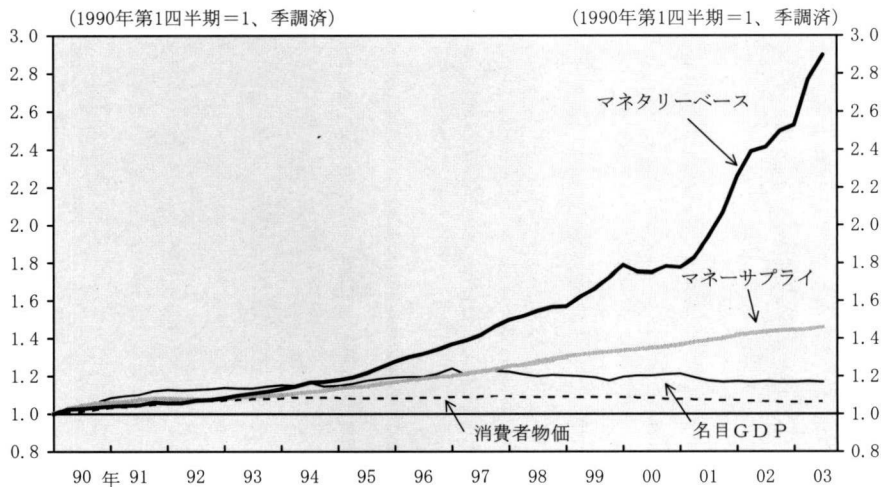
量的金融指標と経済活動

（1）2001年3月以降の推移



- （注） 1. 当座預金残高と銀行貸出は原計数、その他は季節調整値。
 2. 実質GDPの基準時点は、2001/1Qを採用。
 3. 銀行貸出は、特殊要因調整後の計数。
 4. 消費者物価は、総合除く生鮮ベース。

（2）量的金融指標と名目GDP（90年代以降）



- （注） 1. マネタリーベースは、準備率調整後の値。
 2. 消費者物価は、総合除く生鮮ベース（消費税率引き上げの影響は除いている）。

（資料） 内閣府「国民経済計算」、総務省「消費者物価指数」、経済産業省「鉱工業指数統計」、日本銀行